



TITLE:

殷西周間の青銅容器の編年

AUTHOR(S):

林, 巳奈夫

CITATION:

林, 巳奈夫. 殷西周間の青銅容器の編年. 東方學報 1978, 50: 1-55

ISSUE DATE:

1978-02-28

URL:

<https://doi.org/10.14989/66555>

RIGHT:

殷西周間の青銅容器の編年

林 巳奈夫

一 序

殷周時代の青銅容器は、同時代においてそれを使用した一族にとって高價な寶物であり、また重大關心事を銘文として記すこともある一種のモニュメントであつた。青銅器は、材質の關係もあつて、消滅を免れ、多少とも近い性質を持った他の寶物や記録類の中から今日まで殘存してゐるものが多く、殷周時代の社會制度、歴史、美術等を研究する資料として極めて重要な役割を持つものであることはいふまでもない。

さてこれら青銅容器を何等かの研究の資料として使用しようとする以上、まづその年代が明かにされてゐることが必須である。所が青銅容器の年代づけが殷周時代全體にわたつてよく研究されてゐるかといふとさうでない。或る程度満足すべき状態といふにも程遠い有様である。優れた遺品も多く、殷周革命前後の歴史變革を考察する資料としても興味深い、殷西周間の青銅器の年代づけなど、研究者の間にも不一致が多く、遺物の展示ないしは圖録類を見ると、一つの青銅器がどうして殷とされ、よく似た他の一つがどうして西周とされてゐるのか、一般の人人には——時には専門の研究者にも——どうもよくわからない、などといふのは別に珍らしくもないことである。

筆者は殷周青銅器全般にわたって、いづれ何等かの形で編年を發表しなくてはと考へてゐるが、その小手調べとして、ここには最も問題の多い、この殷の終りから西周の前期にかけての青銅器について筆者の方法を試みることにしたい。筆者の方法とはかうである。即ち、問題の時期に當る青銅器を、主として器の形に注目して型式學的先後を決め、ついで年代の確實に知られる幾つかの銘文を參考にすることによって、どの型式が殷時代に屬し、どの型式からが西周のものであるか、それに絶對年代を與へる。この際、最初は紋様や銘文を考慮の對象から外し、器の形態、特にその側視形を第一級の重要性をもつ標準にとつて型式の先後を考察する。この時期の青銅器には饕餮紋その他變化に富んだ紋様が豊富に飾られてゐて研究者の目を奪ひ、或ひは編年に役立ちさうな銘文も數多くあつて注意をひきつけるのであるが、それらにはひとまづ目をくれず、専ら器の形態に注目して型式學的編年を行ふ。ここの所が肝腎なのである。かうすることによって始めて、同一器種内においても紋様や附加的な裝飾のために一見随分とかけ離れた様相を示す、變化の多い各類の全般にわたつて、それら相互間の平行ないしは前後關係が明かにされ、更には複數の異なつた器種を通じての同様な關係が、すっきりした形をとつて姿を現してくるのである。その結果は別刷の編年表に御覽のごとくである。

形態の特徴の點で共通する器を寄せてゆくことによって、當然のことながら紋様とか銘文の字體や書式にも、一時期に特徴的なものが幾つか浮び上つてくる。器形の型式學的研究が進めば、その過程で歸納されて來るかういつた紋様ないし銘文の特徴も、編年の補助として使用されうることはいふまでもない。

以下、次章においては、殷西周間の青銅器編年に關する從來の研究方法的紹介と批判を行ひ、次に三章において筆者の方法による研究を呈示する。特に専門でない讀者には、次章をとばして三章から読み始めることをおすすめる。

二 従來の研究

殷西周間の青銅器の年代を考へるに當つて、宋時代いらい現今に至るまで研究者の頭に引掛つて離れなかったのは、器につけられた銘文によつて殷の青銅器を辨別しようといふ考へであつた。これは方法として不適當なものと考へる。以下に述べるごとくである。

水野清一氏は一九五三年「殷商青銅器の編年の諸問題」⁽¹⁾の論文を發表し、殷後期の終りより西周の前期ないし中期にかけての青銅器につき、各器種毎にどのやうな型式のものが編年的にどのあたりに位置づけられるかについて論じたものであるが、何をもつて殷と判定するかの標準については、傳統的な銘文を基礎とする方法に賛意を表してゐる。⁽²⁾水野氏は宋以來の銘文による判定法を學史的に引いて自分の考へを述べてゐるので、行論の便宜上、それを引きながら過去のこの方法に對する筆者の見解を述べてゆくことにしたい。

水野氏はまづ「宋の呂大臨の考古圖には……鄴郡賣甲城（おそらくいまの安陽の殷墟）からでた兄癸彝（卣）を商器とした。これは(1)この器が殷墟から出たこと、(2)王の紀年を祀でかぞへたこと、(3)兄弟相續のこと、(4)十干による人名のこと等を理由にしてゐるのであつて、今日といへども、したがふべき見解である」といふ。思ふに、殷墟から出土するのが總て殷時代のものかどうかは決し難い。殷の滅亡後に直ちに無人となつたとか、周人が移り住むこともなかったといふことは全く證明されないからである。況んや殷墟から出土したといふ傳聞では益々證據としての價值が乏しい。(2)の紀年を祀で數へる風であるが、これが周に残存してゐることは西周の大孟鼎の例でよく知られ、更に遙かに降つて戰國の楚王盍章鐘にもある。⁽³⁾(3)の兄弟相續が殷の王室で行はれたことは確かであるが、周に入ると共に失はれたといふことは證明されてゐない。(4)の干支名による命名が周に多くあることは、今日ではよく知られてゐる通りである。従つて「今日でもしたがふべき見解」といふことは全然言へ

ないことである。

次いで水野氏は、羅振玉が『殷文存』⁽⁴⁾を編集したが、その標準としたのは十干による人名と圖形的な文字の存在であったこと、そして前者は周まで及び、後者は夏にまで遡るかもしれないと言っていることを肯定的に紹介する。思ふに圖形的な文字（圖象記號）にしても、そのつけられた個々の器が殷か周か、いつ時代のものか相當のオーダーの數量において知られてゐない限り、どの時代に一番多かった、といふことは言へないはずで、圖象記號といへば殷時代が中心だ、といふ當時の認識は一向に證明されたものでないことを想起すべきである。

次に水野氏は馬衡の「中國之銅器時代」⁽⁵⁾の說を引く。青銅器銘文を殷代のものと判定する標準として殷虛の甲骨文と以下の點で共通點を有するものが考へられるといふのである。（甲）日を始めに記し、最後に月、王の何祀といふもの、（乙）祖、妣を十干名で稱し、妣を爽と稱し、また祭名に遘といふものが出てくるもの、（丙）祭祀名に「癸日」「彤日」とあるもの、（丁）甲骨文によく見る人方を征する記事のあるもの等である。これについて水野氏は「これは羅振玉より一步すすめたもので、今日といへども、これ以外の方法はない」と評する。⁽⁶⁾（甲）についてはこれが十分證明力を有しないこと、前記の通りである。

一方、（乙）は後にも引く戊辰簋のことであるが、これは殷王室の祖先祭祀であるから、殷王朝滅亡前のものであることは殆んど疑ひない。また（丁）は小臣餘犀尊、小子魯卣のことであるが、これは周に入ってから殷と同じ事件があったかどうか頗る疑問であり、従つてこの銘のあるこれらはほとんど間違ひなく殷末の器と判定しうる。（丙）については、殷滅亡後にその殘存者によつてさういふ祭祀が續けられた可能性も排除できないので、これだけをもつてその銘を殷時代のものとすることはできない。以上、馬衡が擧げた四項のうち、例數の多い（甲）がだめとなると、以下有效なものはあるにはあつてもほんの少數例に止り、實際には第三章（二）節に引く二三例に適用されるにすぎず、殷時代の銘文を辨別する上の一般的な原則とはいひ難いのである。

次に水野氏はカールグレンの論文 *Yin and Chou in Chinese Bronzes* ⁽⁷⁾を引く。これはよく知られるやうに圖象記號のうち

で亞(亞字形)、⁸ 斂(斂子孫形)、⁹ 𠂔(舉形)は確實に殷時代にしかないものと考へ、この銘の存在を殷時代の器の標準とするのである。この三種の記號は、銘文——時にかなり長文のものもある——の中にしばしば現れるが、その銘文には周たることを示す文字のあるものが一つもない、といふのがこの三つを殷の標準に選んだ理由である。カ氏は圖象記號や十干をつけた人名を殷の標準と考へる見方に對して、それが周にも存在することが知られる——例へば令方彝——ことより、それに反對してゐるのに、どうしてここに來てかやうな論理的な誤りを冒したか不可解である。他の圖象記號について殷から周にわたって存続したことが知られる以上、カ氏の擧げた三項も同じ圖象記號であるから、たとへ現今の資料からは言へたとしても、¹⁰ 將來出現する資料については全く保證されないからである。

ところが水野氏はカ氏の考へにコメントを加へた末、「要するにカアルグレン説が、殷器の確實な基準として亞字形と斂子孫形と擧(向)形の三項をえらんだことには異議はない。たゞしそれはあくまで時代を決定するものでなく、様式をきめるものと解すべきである」とする。¹¹ 思ふに、カールグレンが採つたごとき誤つた標準で選び出した銘文を目安に拾ひ出した「殷式」の器から、何等かの納得のゆく様式の基準が歸納されたとしたら奇蹟であらう。

水野氏はまた殷時代に屬する、といふことと殷様式といふことは別であることを論じ、カールグレンの説を引く。即ち、カ氏は殷様式、周様式の青銅器は分けることができるが、それらを殷ないし周といふ絶對年代で區別することはできないと主張し、次のやうにいふ。即ち、同じ型式で同じ紋様を持った器は長い期間にわたって作られ続けた。青銅器の工房に神聖な傳統を守らうといふ保守主義が存在し、周は殷のかういふ工人達に引續き仕事をさせたことに由る。この事態は殷周革命後大體一〇〇年は續いた、と。¹² つゞいてこのことの例證として極めて近似した器形、紋様の器で殷の銘(カ氏の標準で亞字形、斂子孫形、舉形のいづれかを伴ふといふこと)を持つものと、周の銘(周代たることを示す人名、地名等の出てくるもの)を持つものの圖版十餘組をかゝげて見せる。¹³ カ氏の引く殷、周一組の銅器は確かに極めてよく似てゐる。ところでカ氏の選んでみせた各組の銅器の寫眞を前にして普通の考古學の素養のある者なら誰でも直ちに感ずるであらうことは、これはカ氏の殷時代の器

を辨別するために選んだ亞字形等々の標準が全く誤つてゐることの何よりの證明だ、といふことではなからうか。器物の形と紋様は、同じ時期のものは共通した特徴をもつものであり、それはまた時がたつにつれて變遷してゆく、といふことは考古學の遺物研究の大前提であり、これは例外なく層位學的研究によつて裏づけられて來た事實だからである。カ氏が示した程度に近似した形、紋様をもつた器は、考古學の編年の操作においては通常同時期と認めるものである。この程度に近似した器の一方に周であることの確かな銘がつけられてをり、一方に亞字形ないし析子孫形、舉形などの銘がつけられてゐる場合、後者の銘は前者と考古學的に考へて同時期だと判斷すべきである。残念ながらカールグレンは言語學の専門家で考古學者でなかつたため、自らの研究方法の破綻の例證を自ら呈示しながら、自ら何を證明して見せたのかに氣付かなかつたのである。水野清一氏が殷周の器を銘文で辨別しようとするカ氏の研究法に賛意を表し、このカ氏の對照圖を引いて有益だと記してゐるのは一體どうしたことであらう。

容庚は『商周彝器通考』⁽¹⁶⁾において上編第四章に「時代」の章を設け、『考古圖』以降郭沫若の『兩周金文辭大系』に至る年代判定についての研究史をあとづけた後、銘文によつて周代各王に歸屬させうる銅器を列舉し、また下編に器種別に商、西周前期、西周中期等時代別に例を引き、圖版を掲げてゐるが、その方法は水野氏が「容庚の方法は、まづ個々の器銘で時代をきめ、いくらか器制を參照する程度で、けつきよく器制の様式については一貫した方法がたつてゐない」と評する通りで、研究の方法としては參考するに足りない。

水野氏は次いで陳夢家の様式研究を紹介する。Styles of Chinese Bronzes⁽¹⁷⁾である。尙を例に殷から西周中期にかけての様式研究を行ったもので、その年代判定は銘文によつてゐる。そして殷の銘と認める標準として

- 1、書體が周の金文より古く甲骨文に似るもの
- 2、文の構成が甲骨文に似るもの
- 3、歴史的事實が殷に關するもの

4、安陽の遺蹟から出土したもの

を擧げる。⁽¹⁹⁾ 水野氏は「様式分析も徹底してゐるし、論述も明晰である」「きはめて穩當な見解で結論は正しい」と評價してゐる。⁽²⁰⁾

思ふに、右の標準のうち、1に甲骨文の書體に似るものといふが、例は示されてゐないし、金文と甲骨文は全く別の技法で書かれる文字である所から、どういふものをもつて似てゐると認めたか、十分わかりかねる。2、3、も例が示されてゐない。前引馬衡の標準の(甲)、(丁)に該當すると思はれるが、それについての評價は前に記した通りである。4に擧げられる安陽出土といふことが必ずしもそれが殷時代に屬するといふことゝ同一でないことも前に記した通りである。陳夢家は容庚が次のやうに言ふことを引く。即ち、民國二三年に中央研究院は殷代の墓を發掘して青銅器を多數獲たが、それをもつて證するに、從來著錄に殷とされて來たものは大體確かであることがわかつた。この發掘品は未公刊だが、『鄴中片羽』を検すると、商人が購入した品物ではあるが、蟠螭鐘が形制からみて時代が周に降る以外、他は大體たしかに殷の器といへる、と。陳夢家は容庚が中央研究院の通信員として發掘品を見てゐることに注意する。⁽²¹⁾ 然し容庚は「大體」といつてゐることに注意する必要がある。陳夢家はこの論文を書いた時に安陽の發掘品を見てゐず、「安陽の遺蹟から出土したもの」といふ時、傳安陽出土の銅器のことを言つてゐるのであるが、古物商の傳へる出土地の情報がどの程度當になるかについては確かめる術がない。⁽²²⁾ 然し次のことには注意しておく必要がある。即ち、安陽出土品イコール殷代のもの、といふ觀念が根強く存續してゐる所から考へ、古物商から購入された傳安陽出土の器を殷のものとして研究資料に使ふといふことは、それが市場に出廻つて來た時分に古物商、古美術蒐集家の間でこれが殷だ、と考へられてゐた通念を再確認するといふ以外の成果しか生まない可能性が強い、といふことである。

陳夢家は彼のたてたA、B等各様式について、銘によつてみると某グループは恐らく殷である、といふやうに必ず銘文のことをいふが、具體的な例も、またその銘が彼の1—4のどの標準に當るかにも言及しない。然し彼が殷とする銘文には様式を

歸納するに足る程の數があるわけでないことは始めからわかつてゐることで、一々自分の立てた標準を嚴密に適用して言つてゐるのでないことは明かである。⁽²⁴⁾そして、「銘文によつて某グループは恐らく商に入ると思はれるが、西周初につゞくかも知れない」⁽²⁵⁾といふやうなことをいふが、さういふ微妙な點まで銘文によつて判定できるといふことは到底ありえない。従つて陳氏が「銘文によると」とのみいつて例證を擧げてゐない場合は、どの程度のことに據つて言つてゐるのか甚だ疑問である。もつとも西周の前期から中期にかけての器には銘文によつてかなりはつきり知られる類もあり、それらより様式的に遡りさうなものといふことで、勘の働く人なら大體妥當な線が出せることもあり、陳夢家もその一人である。然しこゝに問題なのは論證の方法である。

さてついで水野氏は本論に入り、殷後期、西周前期頃の器を器種別に檢討する。例へば簋は(a)無耳、(b)兩耳、(c)三耳、(d)四耳の四類に分け、ともに器側のカーブによつて五類に分類する。(1)口の斜めに開くもの、(2)口が開き、胴が張り頸の強くくびれたもの等々。そしてこれらの組合せで a_1 a_2 等々に分類、各類の例を擧げて殷か周かについて論ずる。「 b_1 は圖形父己帶文百乳簋(商周二二三、鄭初上一六)……いづれも安陽出土の殷器である。……ところがこれに對する明確な周器はない……」⁽²⁶⁾と。こゝ以外にも(傳)安陽出土といふことから殷代の器だといふ判斷が多く示されてゐるが、その判斷が誤りであることは前にも度々記した通りである。

ついで「 b_3 も安陽出土品がない。けれども、無銘乃至圖形文字のものは多い。容庚氏の通考(原文は「集錄」と記す)でみると、殷器と稱するもの史形帶文饗饗文簋(二二〇)……および析子孫形をもつた向形帶文の一簋(二二七)はカアルグレン氏も殷器と認めるものであるが、その他の器もそれと同じ程度に殷器とみなして差支へない」と。こゝに列擧された b_3 型といふのは、兩耳で口の開きが少なく、胴張りの少ないもの、自然に頸のくびれも少なく、直線的である、といった特徴をもつて拾ひ出されたものであるが、右の向簋ほか、丈が全體に低く、分類を別にすべきものが混つてゐる。他にも各型について引用された器を圖版について當つてみると、形態からみて分類を別にすべきものが同一型とされた一群の中に混在することが多く、

氏の觀察はかなり杜撰といふ他ない。

右に引いたものは安陽出土と傳へられる、とかカールグレン氏の殷とする析子孫形を銘文中に持つとか、多少の根據をもつて言及された例であるが、b₂型（有脚兩耳簋）も「また周初の形式で、殷末に出現した器形であらう」⁽²⁷⁾、四耳簋は「これを殷末の器とすることは、あまり異論のないところであらう」といったやうに、論證もなしに自分の感想を記した所も多々ある。當つてゐればまだよいが、こゝに引いたやうに見當外れのものが目立つ。かうなると青銅器關係の圖録を前にしての獨り言でも評すべきものである。

主として殷の銘文を目安にして青銅器の殷周への歸屬を考へた論文としてケイン氏が一九七三年に發表したものがあ⁽²⁸⁾る。青銅器銘文中の、それで祭るべき祖先名の文字を編年の目安にしようといふものである。氏は銘文中に十千名をもつて祖先名を記すのは初めは殷王室の祖先祭祀に關して始まつたもので、後に貴族達の間に擴まつたであらうことを想定し、また殷の晚い時期に始めてこの種の文字が青銅器銘文に現れることに注目する。次に司母戊鼎をとり上げる。この銘に母戊の名が記されるが、この現今知られる最大の青銅器は王室の力で作られたものと考えねばならない。さうすると武丁以後戊の名で呼ばれた殷王の妃は、甲骨文によつて武丁、祖甲に、また戊辰簋によつて武乙に居たことが知られるうちの、いづれかでなければならぬ。そのいづれであるかについては戊字の字體を參考にする。即ちこゝに使はれる戊字は董作賓の「甲骨文斷代研究例」⁽²⁹⁾の干支字演化表と對照してみると、甲骨文の第一—四期の字體に當り、中央の長い縦劃が眞直で下端の止めが水平に引かれてゐる點、第五期の體の中央の縦劃の下が曲り、そこに短いたすきが斜めに引かれるのと異なる。故にこの銘文は甲骨の第一—四期の間でなければならぬ。一方青銅器の銘文に出て来る祖先名の戊字を調べると、甲骨文第一—四期の形は極めて稀で、第五期の形が大部分である。すると祖先名を青銅器に記す風は、この司母戊鼎あたりに始まつたもので、この母戊は武乙（甲骨の第四期）の妃といふことになる、と考へる。そして母戊と記してゐる所から、于省吾も考へたごとく、⁽³⁰⁾この司母戊鼎は武乙の次の王、文丁時代の作といふことになる、とする。

さてケイン氏はマックス・レール氏の殷代青銅器の五様式區分説^④が現今においても殷青銅器の時代區分に正確で便利な基礎を與へてくれると考へてゐるのであるが、その一、二式は現今では鄭州二里岡期に入ることはその後の發掘調査で明らかにされたとして、三式以下を次のごとく各王に割り振る。即ち三、四式はケイン氏のいふ安陽前期で、武丁末年がその終末。五式のうち銘に十千の祖先名を持たぬものが氏の安陽中期、それを持つのが同後期で、その境はさきの司母戊鼎の作られた時代、即ち文丁時代と考へる。

ついでケイン氏は更に時代區分の目安となる銘文の字體を見附け出してみせる。董作賓の前引甲骨文字體變遷の表で、癸字が一—四期には父の形に書かれるが、五期に父の形に變へることに着目、ブランドイジ・コレクション中の父癸銘の簋に癸を父と書くことから、この器が武丁時代であることを知る。またこゝに父字を父に書くが、これを一番古い形の父字と認める。三本の指の一番上の指が手の甲の線と一つづきになり、下の指が卷いてゐる所に特色がある。戊字が甲骨文第五期の形をもつ上海博物館藏の方彝の銘があるが、父字は父の形をなす。上の指と手の甲の線の書き方は同じだが、下の指は父の形の下を包む形になる。これが次の段階で、この形は何かの證據をもつて西周に歸せられる器には出て來ず、後期安陽期、特に帝辛時代の基準になる。帝辛時代に多くなるのは父の形で、上の指は手の甲の線と一つづきにならず、また右下にのびる腕に當る線が一つ前の期のやうに角張らず、なめらかな曲線をなす。殷王朝の書記は殷滅亡後周初にも續いて活動したのでこの最後の形は周初にもつゞき、例へば令方彝にも見出されるが、見間違ふ餘地なく時代の降り、高度に發達した形をもつてゐて、克殷の前と後のものを判定しかねるといふことはないと斷言する。ケイン氏は更に彝字についても同様な字形の變遷をたどつてみせる。

以上のケイン氏の議論は論理的に筋が通り、考への進め方も精密なごとくである。然し全く證明されてゐない大前提に立つて議論を進めてゐることを自覺してゐないやうである。それは、甲骨文と金文に使はれる文字の字體が時代と共に平行の變遷をたどつた、といふ前提である。然しこの前提は明かに誤つてゐる。金文には筆で書いた線の圓み、太細が多少とも忠實に寫されてをり、これは筆で書かれた文字の分類として扱ひうるのに對し、甲骨文は龜甲や獸骨に彫刻刀で彫るための文字である

ため、線をなるべく直線化した特異な字體である。「子」字の頭を四角に書き、鼎をと匚簡略化するなど一々例を擧げるまでもない。甲骨文と金文の字體が平行の變化を遂げなかった例としては、ケイン氏の引く若干種の父字のどの字體も甲骨文には全く見出されないことを指摘するだけで十分であらう。

更に次の例は興味深い。即ち涇陽高家堡出土の卣に父戊戈形の銘の戊字を³⁶⁾と書き、同墓出土の戈形父戊盃に戊を³⁷⁾と書くものである。³⁶⁾董作賓の甲骨千支字の字體變遷表で甲骨文では殷時代の違ふ時期に使はれたことの知られる二つの異なった體が、西周前期に、同じ諸侯が作らせた同文の銘に併行して使はれてゐるのである。このやうな例は現在他に見出されないといへ、地域、傳統を異にする工人によって作られた青銅器銘文に、殷王朝の、それも銘文製作とは直接關係がなかったと想定される官の使った特殊な文字の時代による變異をあてはめることの不當なことは、何もこのやうな證にまつまでもないことである。

たしかにケイン氏が指摘する、金文の父字のうちの古い體と父形の癸字が伴ふ例は、ケイン氏の引く以外にも例があり、またケ氏の示す父字の時代による變遷の順序も大筋において誤つてゐない。問題はそれと甲骨文との誤つた平行關係の想定、或ひはレールの五樣式區分を基にした樣式上の規準による少數例に關係づけて、各段階に帝辛とか帝辛末期などの年代を與へたことである。一定の時期に特定の樣式の器が作られ、特定の樣式の紋様や文字が使はれたことは當然のことであるが、文字なら文字にしても、どのやうな字體が帝乙に屬するか帝辛に屬するかなどといふことは器の型式の變遷のあとを確立して後に確定すべきことで、その手續を経ずに幾つか都合のよい文字を拾ひ出して別の思ひつきの手段でこの體は帝乙、この體は帝辛と年代を與へ、それに頼つてそのつけられた器の年代を決めてゆくといふのは、研究の手續として誤つてゐる。

ケイン氏はその論文の終りに、自分の編み出した規準を適用して、殷西周間の卣の變遷をたどつて見せる。これが納得ゆくものであれば、氏の規準の有効性が證明されるのであるが、その結果は甚だ不満足なものである。氏は器腹に大きく饗鬣紋をつけ、大げさな鱗を具へた卣（本論文附表③②の類）を安陽中期後半（康丁、武乙時代）とし、器腹に直條紋と大きな鳳凰紋を飾り、大げさな突起を出した類（本論文附表④の類）を安陽の趣味にはすぐはないものと見て克殷前の周器と考へる。

そして殷の末には白鶴美術館藏の小子喬卣（本論文附表卣①(9)）のごとき、頸や足に紋様帯をつけるだけで他は素紋の、あっさりした装飾のものがさきのごてごてした類にとって代ると考へる。第三章に筆者が示すごとく、ケイン氏が時代の先後に分けて説明した二類は、同時期に行はれた異なった様式と認むべきものである。

以上は主として殷のものと判断される銘文の存在によって殷の青銅器を辨別するといふ立場の紹介、批判である。次に周の銘文を主とした考察について評論を加へる。

確實に殷時代のものとして證される銘文が稀少であるのに對し、間違ひなく周のものと知られる銘文はかなりの數にのぼる。成周、宗周等の地名の出てくるもの、文王、武王、成王などを祀ることを記したものなどである、更に郭沫若は『兩周金文辭大系』⁽³⁸⁾を著し、銘文に記される人名、事件等をもつて幾つかの銘文を結びつけて群とし、西周時代の金文を年代的に系統づけた。陳夢家、白川靜もこの方法を踏襲し、共に改訂、増補を行つてゐる。然らばこれら銘文によって編年された有銘の青銅器を年代順に並べることによつて西周に入つて以後の青銅器變遷のあとがたどられるであらうか。それは否である。理由は次のごとくである。

郭沫若が『兩周金文辭大系』の初序に記す所からわかるやうに、銘文自體から周の何王のものと知られる例は多くないから、異なつた銘文中の人名或ひは場所の名、銘中に記される事件の同一等をもつてそれらをほゞ同時代のものと判断して關聯づけてゆかなければならない。その際銘文の體例、文體、その銘文のつけられた器が知られる場合はその紋様、型式などを標準にして、同一時代と認めて差支へないと判断してゐるのである。某伯、某宮といったものは當然かけ離れた時代にも存在しうると考へられるからである。

ところで、右に器の紋様、型式といふ標準が出て來たが、これこれの紋様は大體この頃に多いとか、これこれの字體はこの時代に使はれてゐるとかといった、銘文の内容以外の、いはゞ美術史ないし考古學の領域に屬する知識については、銘文の研究

者の中に本氣で正面から取り組んだ者がゐるわけではない。研究対象となる銘文のうち、そのつけられた器の寫眞の知られるものは多くないのであるが、⁽⁴¹⁾それらを材料にこの分野の年代觀を頭の中に作り上げてゐるものと思はれる。とはいへ、青銅器のうち研究対象として興味を持たれるごとき長文の銘を有するものは青銅器全體からみて僅かばかりの比率を占めるにすぎず、従つて銘文に主たる關心を有する研究者がそれら有銘の器を材料にして組み立てた年代觀は不完全たらざるを得ない。郭氏、陳氏、白川氏などが銘文の年代的歸屬を考へるに際して、銘文の内容以外の材料を参照して判斷を下す場合、大體妥當なこともあるが、見當が大分外れてゐることもあることは致し方ない。

例へば郭沫若が『大系』で師湯父鼎の條に「この銘は文辭、字跡、款式ともに趙曹鼎第二器に類す。二器ともに新宮あり。新宮とはけだし新建の宮ならむ。決して同時の器たること疑ひなし」⁽⁴²⁾といふのは妥當である例。また宗周鐘を昭王時代のものとし、その紋様を『武英殿彝器圖錄』四六葉の史簋の紋様と比べてその年代を證しようとした條は失敗例である。⁽⁴³⁾

また陳夢家が『斷代』で例へば過白簋、欽簋等南征の記事のある諸器を郭沫若、唐蘭が昭王南征の傳説に結びつけて昭王時代のものとしたのに反對し、成王時代に上げ、その理由の第一にそれらの器の型式、紋様、銘の文字が成王に屬するといふことを擧げる。⁽⁴⁴⁾然しなぜその型式、紋様等を成王と決めたかの證明はない。かういふ確信ありげな斷言だけで器形、紋様を論ずることは許されまい。また鬲尊、耳尊について「その型式、紋様、銘文の文字は成、康のものに屬す」といふ⁽⁴⁵⁾などもその例である。

白川氏も『通釋』において各器の銘文の考釋を行ふに當り、器の型式、紋様にも注意を拂ひ、その編年上の位置づけについて觸れた所が多い。然し或る器の型式や紋様を解説するに當り、そこにいふ年代についての斷言の根據を殆んど示すことがない點、陳夢家と同様である、然し時には例へば效父簋⁽⁴⁶⁾について「器腹の主紋様は叔德簋と同じく大きな卷尾様の獸である……兩耳犧首、犧首の耳は張大にして大豐簋と似ている。前後の正中に鉤稜がある。……この器や大豐簋によつて、この種象文の諸器は康期に屬すべきことが知られる」⁽⁴⁷⁾といふやうに解説を加へることもある。一方例へば御正衛簋について「器銘は行欵整

い、字樣も小字である。昭穆期に至って多く行われた。器の顧首龍文がやゝ形式化の方向を示していることゝ合せて、器の時期は康末以後にあるものと思われる」とあるなどいかにであらうか。龍の紋樣についてそのやうな微妙な年代がわかるものかどうか私は知らない。

このやうに、西周時代の青銅器銘文の編年作業には、銘文以外にその研究者の西周青銅器の器形、紋様の變化についての觀念が織り込まれてゐるのである。従つて從來の銘文研究者が西周の王名のもとに配屬させた所の銘文のつけられた、もとの青銅器を拾ひ出し、それらをその言ふ所に従つて配列してみても、西周の青銅器の様式の變遷の骨組が客觀的な形で組み立てられるということは、理論的にありえないことである。

さらに、右に引いた所からも知られるやうに、銘文の研究者はその年代について何王の時代といふ形で記すのが傳統のやうである。ところがよく知られてゐるやうに西周の各王の在位年代は宣王以前については漢代に既に確かな記錄が失はれてをり、推定の說には異說が多い。⁽⁴⁹⁾今問題の陳夢家、白川兩氏とも夫々獨自の在位年數の推定を行つてをり、殷周革命の年代についても一〇〇年ほど說が違ふので、同じやうに成王末年とか康王時代とかいっても、絶對年代で考へると随分違つた年代のことを言つてゐることになるのである。

右に見たやうなことで、銘文の編年的研究者の仕事には、器物の形や紋樣についての生はんな知識が働いてゐるために、その業績もこの論文で問題にする西周の早い時期の青銅器の年代的位置づけといふやうなことを扱ふ場合には、到底安心して借用できるといふやうな性質のものでないことが明かにされたであらう。

右に論評を加へた類の他に、青銅器の器形、紋樣を主にしてその殷、周への時代的歸屬を論じたものが幾つかある。ウォーターベリー⁽⁵¹⁾は殷と周の器はその側視形によつて分けられるとし、周の器は輪廓線を強調し、觀者の目はそこに留るのであるが、殷の器では目はそこに留らず、靜的な姿をもつ、といふ。そして殷の器は非常に晚い時期の様相を示し、その後の時代には發

展せず、粗雑になつてゆく、と考へる。

思ふに、時代による青銅器の變遷を考へる上に、その側視形に着目したのはよい。然しここで殷代の周だのといふ時に、何を標準に分けて右のごとき立言をしたか、肝腎の所が明かにされてゐない。そして女史の側視形の觀察も、どうも精密さを缺くやうである。即ち、フリア美術館藏の人面盃について、その低いしゃがんだやうな側視形は殷のものに似ず、決定的に周のものだといふ。⁽⁵²⁾後に示すやうに、確かに西周初から少し降つた時代の尊、卣、簋等の容器の部分はひしゃげたやうな側視形をもつ(別刷表のd欄)。然し、これらには必ずひしゃげたやうな下擴がりの足がついてゐて、それをもつて始めてその特徴的な側視形が完結するのである。一方フリアの問題の盃の足は外に擴がる部分を缺き、全く別物である。この足は西周は勿論、殷後期の終りの方の時期にも見ないものである。容器の一部分の形のみをもつて側視形を云々するのは誤りである。

岡田芳三郎氏は水野氏の前引論文の掲載されたのと同じ號の『東方學報』に「寶雞鬬雞臺の諸器について——中國古銅器聚成への一つの試み——」⁽⁵³⁾を發表し、殷周青銅器を紋様の組合せによつて編年的に位置づける方法を提示した。そして所謂枳禁の中の鼎形銘をもつ卣、尊、饕餮紋爵、祖癸角をとり上げ、その夫々について紋様の觀點で同時期と認められる器、相對的に年代の降る器を引き、降る器のうちに銘文の内容から周初とされてゐるものがあり、遡る例に殷代のものと認められるものがある點に注目し、所謂枳禁中の卣、尊等前引の器が殷末に位置づけられることを論じたものである。

氏の結論は凡その見當において誤つてゐない。然し論證の過程には幾つか誤りがある。第一は、共通した種類の紋様を持つ器が同時期だと言へるのは、その表現型式も同様な場合に限ることが、必ずしも自覺されてゐないことである。例へば氏が掌狀角を持つ犧首を同時期の證とするのは正しい。⁽⁵⁴⁾引かれる例は表現型式もほゞ共通してゐるからである。一方岡田氏のいふ花形虺紋(筆者の井紋と呼ぶもの)⁽⁵⁵⁾が殷代の器にしばしば見るものとして殷的な要素とするのは右の意味から言つて正當を缺く例である。⁽⁵⁶⁾

第二は如何なる器を殷のものとするかの標準である。岡田氏は「殷末から周初にわたつてそこにはずつとひきつゞいた古銅

器の系列があつて特に兩期を分つ一線は明瞭には出ない⁽⁵⁷⁾」との意見なのであるが、殷と考へるに當つて『鄴中片羽』に納められてゐる、梅原博士の『河南安陽遺寶』に納められてゐるといふやうな理由があげられ、また「全體に示してゐる古調から云つても當然殷代のものと考へられる」⁽⁵⁹⁾とも記される。前二者は古物商の傳聞で、學問的價值に乏しいことは前にも度々記した通りである。後者の「古調」となると、これは單なる印象で批判の對象にもならない。

第三に、同じ圖象記號を持つ器を年代的に近いものとして引いてゐるが、圖象記號は紋章的なもので何世代でもつゞき得るものである所からこれは適切でない。令方彝と作冊大鼎が父子二代の作で、同じ鳥形冊の圖象記號を持つことは以前から知られる所である。

樋口隆康氏は「西周銅器の研究」⁽⁶⁰⁾において當時までに報告書が發表されてゐた革命後出土の資料を基にし、銘文と器形、紋様の兩方面から類縁の器を集め、幾つかのグループを設定、そのグループを據點にして西周青銅器の編年を行った。扱はれた限りにおいて、妥當な線が出されてゐる。ところでその際「西周青銅器」として利用されたのは、銘文によつて西周のものと知られる器と、器形、紋様の點で結びつく發掘資料である。そして西周初期の前に「殷」、「殷周式」の段階が設けられてゐる⁽⁶²⁾。そして「山東益都蘇埠屯、長清興復河、滕縣井亭、山西省石樓二郎坡、呂梁石樓鎮……」などから出土した殷式あるいは殷周式の諸器は、西周銅器を殷銅器から區別し、克殷以前の周銅器の有無をさぐるなどの問題に對しては、必要缺くべからざる資料である⁽⁶³⁾と記されるが、西周青銅器の上限は果してどのやうな型式のものであつたかの問題は正面から論ぜられてゐない。

三 本 論

(一) 編年表説明

殷周間青銅器編年に關する先人の試みについての討論はこれ位にして、次に筆者が冒頭に述べた方法、即ち考古學の型式學的硏究法によつて問題の時期の青銅器の編年を試みるとどういふ結果が出るか、幾つかの器種を選んで例を示す。引用するのは科學的發掘によつて出土したもの乃至それに準ずる資料だけではあまりにも例數が少ないので、古物商の手を経た公私コレクション中の青銅器も大量に使はざるを得なかつた。研究の現段階としては致し方あるまい。⁽⁶⁴⁾

別刷りの圖が出来上つた編年表である。水平の欄は上から下に向つて年代の降る各時期を示す。假に a b c d と呼び、殷、周の名稱を冠して呼ばない。一番下の欄は西周中期に當てる。この時期の様式についてはこの論文において論證してないが、この時期の青銅器の器形、紋様はかなり特徴がはっきりしてをり、また銘文によつて何王に屬するか知られる器が比較的多く、一般によく認識されてゐる。勿論この欄に配した器一つ一つについては、各類の解説の所でそこに入れた理由が説明される。a、b、c、d に比べ、それらよりも少々幅の廣い型式のヴァリエーションがこゝに一緒に放り込まれることになるが、この欄に配された器は a b c d 各期の型式變遷の到達先といふ意味をもつ。

(1) 鼎

鼎①類は足の上部分がふくらんでそこに饗餞が飾られ、器の頸部に饗餞紋を帶狀にめぐらす類である。西周中期の丁度これに該當する類はないが(11)は頸に饗餞紋が變形した西周中期式の紋様をつける例で、郟縣出土、長由盃と同出の器である。(12)は頸

の帶紋が違ふが、足の型式が共通した器で——足の上部の饗養紋は消失してその額の鰭のみが残存——、師𣥂の銘があつて共王の八年の作器である。⁽⁶⁵⁾これら西周中期の型式を到達點とすると、鼎①は容器の部分が全體にコロツと圓い、a、b欄に配した形態から次第に器側の曲線が直線的になり、底も圓味を失つて平らとなり、器の最大徑の位置が下に降つてゆく、といふ變遷が想定される。(1)の器は殷後期、大司空第三期に屬する鼎であるが、これに代表されるごとき控え目な鼎の耳はa bと大きさを増し、外向に反出した威張つた形へと變つてゆくのが全般的な趨勢である。(2)の器は耳が小さい所からa欄に入れてある。足はb、cの邊が一番太く、堂々としてをり、cから西周中期には比較的細く、ひよろ長いものに變る。

銘のあるものを示せば、b欄の(4)が安陽圓坑出土の戊嗣子鼎、c欄の(5)が返鼎、(6)が郟縣出土の旗鼎、d欄の(10)が大孟鼎である。

鼎②のグループには頸に平凸細線で饗養を廻らした類を拾つた。鼎①類にみたa b c d及び西周中期の各欄に對應する器形の特徴をもつた器が、この類にも見出されることを示したものである。(1)にみる、鼎①(3)(4)に對應する胴の圓味のあるふくらみ、大きい耳、太い足、全體の安定したバランス、(3)から(4)(5)にかけての、器側の曲線の變化、足が細くなつてゆく點など、一々説明することもあるまい。(2)は足が細いめであるが、器のふくらみの特徴がこのb欄にふさはしいのでここに入れた。

これらのうち、顯著な銘文をもつものはないが、d欄の(4)は父乙臣辰銘をもつ。(7)(8)は紋様の種類が異なるが、西周中期の鼎の一般的特徴を示す例として参考に引いた。即ち底が平らで器側の線が直線的であり、全體の側視形が梯形に近く、足が細いめで長くない、といふ特徴である。(7)は共王の十五年の銘のある十五年趙曹鼎⁽⁶⁷⁾、(8)は銘から共王五年の作と知られる衛鼎⁽⁶⁸⁾(甲)である。

次に鼎の③類。(1)は安陽大司空村五三號墓出土の陶製明器の鼎である。頸に帶紋があり、そこに短い鰭がつき、太いめの足

を威張ってふん張ってゐる。そのやうな特徴をもち、器側のふくらみの具合が近い鼎を青銅器で搜すと(2)の長清興復河出土品のやうな例が見出される。やや外に反った大きな耳をもつ點、(1)の陶鼎の耳が小さいのと相違するが、これは或ひは(1)が陶製の明器であるから、といふことで解釋がつかう。(1)(2)の耳、足、器側のふくらみ、全體のプロポーションの特徴は、b欄に適合する。(1)は大司空第四期後期に編年されてゐる。⁽⁹⁹⁾

鼎④には器腹に大きく高凸の技法で饗養を飾る類を示した。(3)(4)の太く、外にふん張り氣味の足、少し外に反った大きな耳、全體のどっしりとしたプロポーションは鼎③(2)ほか、b欄の器に共通してゐる。厚くて高く、目高った鰭がついて、堂々たる風格を一層強調してゐる。この式の大げさな鰭が、この期に指向された威風堂々たる風格を更に強めるために創造されたものであることが知られる。

(1)(2)は(3)(4)と比べて耳が小ぶりである。鼎①(2)とその點共通する。a欄がこれにふさはしい位置である。耳が控えめであるのに對應して鰭も薄く、低い。なほこの類の器にはc以下の欄に對應する器は見出されない。

この鼎④類の器には年代づけに役立つやうな銘文をつけたものがない。

(2) 方 鼎

表には左方に乳紋をつけるものを、右方には器腹に大きく饗養を高凸の技法でつけるものを選んで並べた。足の上部にはいづれも饗養が飾られる。(3)(4)は厚く大きい耳、太い足、厚く高い鰭、どっしりと安定したプロポーションにおいて鼎④のb欄の器に對應する。(5)(6)になると足は細くなり、(7)―(9)になると足は更にひよる長くなり、容器の部分の深さも減じて何か貧相な、不均合な形に變ってくる。これらの特色は鼎①②のc、d欄によく對應してゐる。(10)は容器の部分が更に浅くなり、足はかなり顯著に内股氣味で、鼎②の西周中期の欄の器と通ずる特色がみられる。この時期にはこの型式の方鼎は例外的にしか存

在しない。(10)の器の四隅につくすっきり様式化して鈍重になった鰭も、この型式の器の末期的な姿によくマッチしてゐる。

(1)(2)は(3)(4)に對して、鼎④のb欄に對するa欄の器に對應する關係をもつ。即ち、大體近い形態の特徴をもちながら、耳が小ぶりで鰭も比較的薄く、控えめな姿をもつ、といふことである。

銘について記すと(2)はいふまでもなく侯家莊一〇〇四號墓出土の牛鼎、(8)が作冊大、(9)が徳の作器である。

(3) 鬲 鼎

鬲鼎①は器腹に大きく饗養を高凸の技法でつけた類である。鬲鼎の壓倒的多数はこの類であり、しかもb cの欄に集中する。それ以外の欄に入るものは数から言つて極く稀な例外的な存在である。(1)は鼎④のb欄に對應する器。太い足、大きな耳、威張った堂々たるプロポーション等。(2)は足に陰線で表はされた羽紋をもつ點、鼎④と共通してゐる。耳が小ぶりであるが、他は(1)と共通した特徴をもつ。b欄がこれらの器にふさはしい位置である。(3)(4)は足も太くなく、耳も大きくはないが、器側のふくらみ方、全體に程よい均合をもつ點、鼎②と通ずる所をもつので同じb欄に配したのである。(5)は直線に近くなつた器側の線において鼎①のc欄の器と近似し、(6)も同様な器側の線においてc欄がふさはしい。また足に陰線で羽紋をつける點(1)(2)と共通するのであるが、足は全體に細長くなつてゐる。この足の特色もc欄にふさはしい。なほd欄に入れる例は今のところ見出せない。(7)は内股氣味のひよろひよろした足、浅い容器の部分において鼎①②及び方鼎の西周中期欄の器に對應する。このやうなものは例外的にしか見出されないものである。

鬲鼎②は器腹に大きく散開饗養を飾つた類である。(1)は太く短いめの足、大きい耳、どっしりしたプロポーションにおいて(1)(2)(3)に對應しよう。(2)は器腹の側視形をみると、最大徑の位置が下つてをり、足も細い點からc欄がふさはしからう。(4)は(2)の少々浅くなつたもの。方鼎の型式變化になぞらへてd欄に配した。(3)は型式學的にみて(2)と(4)の中間あたりがふさはしさ

うである。

銘文のある器を拾ふと、①(6)は獻侯鬲鼎、②(3)は匱侯旨鬲鼎である。

(4) 觚形尊

尊①として示したのは、器側に鰭のつく類のうちで最も多い、器腹に大きく饗饗を飾る類である。上擴がりの口頸部の外側には花瓣形を、下擴がりの足には饗饗その他の動物紋をつける。いづれも高凸の技法が用ゐられる。

b 欄に分類したのは、厚く高い板狀の鰭をつけるものである。鼎④の器側につけられるのと全く同じものである。(2)(3)は器腹と足に、(4)(5)は頸の下部にも鰭が加はつてをり、(6)では鰭は更に口縁に及び、縁より外にまでのびてゐる。こゝに引いた(1)―(6)の器は鰭をむしり取つて器の側視形を比較してみると全く共通の特色をもつ⁽⁷⁰⁾。即ち口頸部も足も折れ目のない張りつめた曲線をもつて外に擴がり、全體にずしりと安定した堂々たる姿をもち、鰭がその威張つた姿を更に強調してゐるのである。

こゝに形造られてゐる形態の表現する理念は鼎④に共通し、厚く高い鰭といふ道具立てもこれと共通する。そこでこれをb 欄に配した。(5)は腹に殆んど外向のふくらみがない點に小異があるが、鰭の型式、口頸部や足の擴がりの曲線、高さ、口、足等各部の比率は他と共通してゐるのでこゝに配した。

(1)は鼎④の所にも引いた安陽大司空村五三號墓出土の陶製明器である。鰭は腹部にしか附けられてゐないが、全體の形態の特徴はこの欄に示した青銅器と全く合致してゐる。先にも引いたやうに、この墓は大司空第四期後期のものである。

(7)(8)(9)に示したのは(1)―(7)に示したものゝ細身のヴァリエーションと認められる。口頸部、足部の畫く曲線の特徴も(1)―(7)と共通し、厚い板狀の鰭も同様である。この欄に分類するのが妥當である。

(10)は(6)、(9)のごとく鰭が口縁より外に突出する類であるが、鰭の上部の水平・外方への指向が強調され、(11)(12)では鰭の水平な部分とそこに移行する部分の間に折れ目が出て來てゐる。足の鰭の下端の外への突出部にも特徴的なしやくれがあり、(7)―

(9)よりも更に高くなった足の最下部の圓筒形の臺の上縁にも、外への刃状の張り出しが顯著に作り出されてゐる。これらの點には上下及び水平方向への極端な伸暢に向ふ傾向が認められ、その點(1)―(9)にみる節度を守った型からは外れかけてゐるといへよう。

(12)は厚い鰭、その口頸部における水平方向への突出の特徴において(10)(11)とよく似てゐるが、全體に太短かめで、鰭の厚みも不均合さを感じさせる程に極端に向ひ、足の鰭の下端の突出が、(10)(11)の平鑿の刃先のやうな形から變化して、割箸の先のやうな形に近づいてゐる。これらは後の卣④の條にみるごとくc欄に分類さるべき特徴である。また(12)の尊は鼎形の圖象記號の銘をつけるが、卣④でc欄に分類された(4)(5)の器も同銘をもち、紋様の種類は異なるが、その表出技法は全く同様であり、同一工房、同時代の作と知られる。

さて尊①(12)がc欄に分類されることになると、(10)(11)はこれとb欄の(6)との中間形といふことになる。最終的な年代の決定はさておいて、型式分類のこの表ではb c兩欄の中間がそのふさはしい位置といふことになる。なほこの尊①の類型にはa欄に配すべき器は今のところ見出されない。

この尊①の類型の器の變遷の方向であるが、西周中期には適當な例が見出されない。尊②に分類したのは鰭のついた觚形尊で①以外の紋様を持つものの若干であるが、(5)―(7)のやうな例がある。(5)は郿縣出土の盞尊、(6)は扶風齊家村出土の作文考日己云々の銘を持ち、銘の字體、字配り等典型的な西周中期式の例、(7)は員尊で、これも銘の字體、字配りとも西周中期の特色をもつものである。これらはいづれも器の幅の割に丈が著るしく低く、b欄に示したやうな口頸部から腹、足へのリズムカルな曲線の躍動、有機的なプロポーションなどを全く喪失した姿である。(5)―(7)いづれも口縁から外に喰み出した鰭の先端の垂れ下りが目立つ。足は臺の部分があたかも平たい板を打ちつけたやうな具合に廣くなつてゐる。この足の臺の部分ばかりでなく、器全體が横に擴がり、下方に向つてひしゃげた、といふ特色をもつが、これは鼎や方鼎にも認められた、西周中期の器の著るしい特色の一つである。

尊①のc、d欄には先のb欄のものと、今の尊②にみた西周中期の形態の中間をつなぐやうな特色をもつ器を拾った。c欄の(13)―(15)は(10)―(12)の器に認められた、鰭の伸暢や足の下の高さの増加などによる大げさな威勢の強調を、更に一段と押し進めた類である。銅器の鰭は本来羽根の並列から成り立つものであるが、(13)―(15)の尊はその鰭を本来の羽根の形に象って透し彫にし、器表から盛大に突出させてゐる。これらの器で饕餮の角、牙等を器から浮き立たせ、立體的に表はしてゐるのと對應させたものである。表出の部分々々はこのやうにこけ威しに大げさな表現にしたものゝ、器の全體の均勢は失はれ、全體に不恰好な姿になつてゐる。即ち口頸部と腹はひとつながりとなつてしまひ、足に對して不均合に大きすぎるのである。

d欄の(16)―(19)は全體に幅の割に丈が低く、ずんぐりして、足の最下部が強く張り出し、尊②の西周中期の形に近づいた類である。(16)(17)では透し彫の羽根形の鰭が控え目な小綺麗なものになつてゐる。(18)(19)はマンネリ化したF字形の鰭のつく例。(19)では西周中期に多くなる、額の羽根や角が一つながりの羽根で表はされる類の饕餮が出現してゐる。

以上のうち、顯著な銘文のあるものは、(5)が子光尊、(13)が𠄎尊、(16)が令尊、(18)が𠄎子尊である。なほ(20)(21)には夫々(16)(18)と同銘の方彝を引いてある。饕餮紋その他の紋様の表現が共通する他、鰭の形やずんぐりした、ひしゃげたやうな全體のプロポーション、強く張り出した足の下部の形も共通してゐる。d欄の尊の形態の特徴が他の器種にも同様に見出されることを示すために参考として引いた。

尊②としたのは、さきにも記したやうに觚形尊で口頸部、腹、足に紋様があり、鰭を伴ふもので、腹部の紋様が①以外のものを寄せたものである。

(1)は腹、足に顧首鳥身の鬼神をつけるもの。(2)は足の部分が四角い點に相違があるが、(1)によく似た紋様と鰭をつける麥尊。口頸部と足の比率の觀點からc欄に入れた。(3)(4)は器全體がやゝ低いめなのでd欄に配した。(3)は腹に特徴的な龍首渦紋身の鬼神をつける。(4)は臣辰尊。(5)―(7)については前頁に記したのでくり返さない。

尊③には腹のみに高凸の技法で大きく饗饗紋を飾り、口頸部と足には弦紋以外につけられない類を示した。

(2)―(6)は、尊①のb欄の器から、鱗を除去した時に出現する側視形を持ったものを拾ったものである。(2)は陝西省の収集品、(3)はそれと極く近いもので寫眞の明瞭なものを示した。(4)は靈臺白草坡の出土品、(5)にはそれと近いもので寫眞の明瞭なものをかかげた。(6)は湖南省の収集品。

この類でa欄に配すべき例は今のところ殆んど全く見出されない。参考(1)は安陽大司空村五一號墓の出土品で、同墓からは大司空第三期と判定される卣、鼎などが伴出してゐる。⁽⁷³⁾口頸部、足の開き方の曲線にb欄のものとの相違が認められる。

さてこの尊③の類も尊①②との類推から、西周中期には(14)のやうな、尊②(7)と並行するずんぐりしたものに變つてゆくと考へて誤りあるまい。さうすると、b欄の(2)(3)からc欄の(7)(8)へ、更にd欄の(12)(13)を経て(14)へ、といふ變遷が容易に想定されよう。そのうち、(8)は彭縣竹瓦街の出土品である。

一方、尊①において、c欄の器には太くなつた口頸部と腹部が一つながりになり、それに對して少々不均合な小さめの足がつく、といふ特徴が觀察された。c欄(9)に示したのはその特徴のいさゝか強調された例である。(10)(11)に同じ形態の特色をもつた器を示した。ラッパ形の足の下部の擴がりが押しつぶされたやうな形になってゐるのは、(7)(8)にも認められる所である。

尊③のうち顯著な銘を持つものとしては、(10)が濬伯返尊、(11)が觥士卿尊である。

尊④には腹部の上下に鬼神の紋様帶を飾る類を引いた。(1)(2)はその側視形が尊③のb欄に共通する所からb欄に配した。また(3)は尊③の(9)―(11)に、また(4)(5)は尊③の(7)(8)と、全體の均合や足のひしゃげ方等が似てゐる所から、いづれもc欄に配した。顯著な銘をもつものは次のごとくである。(2)は岡玁尊、(4)は房山琉璃河五二號墓出土の復尊、(5)は濬縣辛村六〇號墓出土の隣尊である。

尊⑤には若干の参考資料を引いた。(1)は細線で表はした饗養を腹に飾る例、(2)は腹に大きく鳳凰を飾る例で、尊③④のb欄に相當する側視形をもつ。(1)は耀縣、(2)は岐山の出土で、いづれも陝西省である。後に異なつた流派の問題を論ずる際に利用される。(3)は太い口頸部と腹が一つながりになり、それに足のついた形の特徴が尊③の(9)―(11)、尊④の(3)に共通する所からc欄に配されてゐる。腹に龍首渦紋身の特徴的な鬼神が見られるので引いた。

尊⑥(1)、(2)は腹に平凸輪廓線の技法で饗養を飾る例。(1)a、bは同器を異なつた方向から寫した寫眞である。これらも側視形の觀點からみてb欄に配してある。第三章(一)節で年代の問題を論ずる際に、一緒に掲げた角と共に利用される。

(5) 卣

卣①としてまとめたのは、蓋の上面のぐるり、頸、足に帶狀に紋様帶をめぐらす類である。めぐらされる紋様は多種類にわたり、一種類のもののみをもつて各期のサンプルを揃へることができないため、こゝに拾つた器の紋様は各種混つてゐる。

b欄の(5)に引いたのは、鼎③尊①の所にも引いた安陽大司空村五三號墓から出た陶製明器の卣である。その器形の特徴をみるに、蓋の器にかぶさる部分の高さは低く、上面の甲も高くない。足は低く、かなり急な角度で外に擴がる。頸に帶狀に斜格子紋が刻されてゐる。これに近い青銅器を探してみると(6)に示したごとき例が見附かる。頸に菱形の雷紋がつき、その點も(5)と通ずる。(5)の陶製明器が象つたのは(6)のやうなものに違ひない。

(7)は腹のふくらみ方、足の形が(6)と極めてよく似てゐる。これは蓋が失はれてゐるが、蓋のついた同形の器としては(8)のごとき例がある。(7)は安陽圓坑の出土、(8)は長安馬王村の出土である。よく似た姿をもつた器としても一つ(9)を引いておかう。これらをb欄に配したのは大司空村五三號墓出土器と共通の特徴をもつた青銅器を先にb欄に配したことが理由の一つである。

が、また(7)の器腹の圓味の曲線が、鼎④(4)に引いた、これと同出の鼎と極めてよく似てゐることが有力な理由になつてゐる。

こゝにb欄に配した器よりも、腹徑に比べて足の上の附け根の徑が小さく、提梁が小さめの(3)(4)をa欄に入れたのは次のやうなわけである。即ち参考(1)(2)は夫々淮陽泥家村、安陽大司空村五一號墓の出土品であるが、いづれも大司空第三期と認められる安陽四盤磨六號墓出土の陶卣と共通した器形の特徴をもち、同時期と認められる⁽⁷⁴⁾。これらの器の器腹は夏蜜柑のやうな圓味を持ち、足が極めて小さく、蓋も浅く、提梁も小ぶりであるといふ特徴をもつ。(3)(4)はこの(1)(2)と(5)―(9)の器の中間の型式をもつと考へてa欄に配したのである。

卣①の類型の卣は、最下欄に掲げた西周中期の(5)競卣に典型がみられるやうに、容器の部分が横幅に比して極めて浅い器に、頭デッカチな蓋のかぶさった形に變化してゆく。また(5)の器から蓋と足を除去してみると、鼎①の最下欄の西周中期の鼎の容器の部分と極めてよく似た下擴がりの平べったい形が出現する。さきにb欄の(7)についてこれが同出の鼎と器側のふくらみにおいてよく似てゐることを指摘したが、この卣①類全般についても器の形の變遷について鼎①に見たのと平行の變遷過程が想定される。c、d欄にはこの容器の部分の器側のふくらみ具合から選擇して若干の器を配列した。後に見るやうに、卣の場合にはc、d欄において、蓋の身と重なる部分の高さの増加、蓋の上部の山形になつた部分の甲高の度合の増加に著しい特色が看取られる。c欄の(11)器は腹のふくらみはb欄のものに近いが、右の蓋の特色からc欄に配したのである。

顯著な銘をもつものとしては、(9)が小子魯卣、(12)が作冊震卣、(14)が遣卣である。(15)が競卣であることについては先に記した。

卣②には器腹に大きく饗饗紋をつけ、頸に狭い紋様帯をつける類で、鰭の飾りを伴はないものを引いた。(1)は繩狀の提梁をもつが、(2)(3)は狭い板狀の提梁をつけ、蓋の上面に大きな饗饗、蓋の側面、足にも鬼神を飾つた紋様帯がある。

紋様を捨象し、器そのものの形をみるに、蓋の器と重なる部分が比較的低く、蓋の上面も甲高でない點、器側の畫く曲線、足の形など、卣①のb欄と全く合致する。そこでこれをb欄に配した。

(1)は滕縣井亭、(2)は涇陽高家堡の出土である。

卣③には器腹と蓋の上面に大きく饗饗をつけ、蓋の側面、器の頸、足などにも鬼神を帶狀に飾り、更に鰭飾りをも加へた類を扱ふ。

(3)(4)はこの類のうち、數の少ないものであるが、提梁が卣①②と同様、長軸の方向についてゐる例である。また(3)は提梁が失はれてゐるが、(4)は繩狀の提梁である。すぐ次に示すやうに、この類型の壓倒的多數は、狭い板狀の提梁が短軸の方向につくのであるが、(3)(4)とも蓋の上面と器側の四方に厚い鰭がつく。その大げささの程度に差があるが、器形は全く同じであつて、期を分ける程のことはないと判斷される。こゝに見る鰭は厚くて大げさな點鼎④尊①のb欄の器にあつたのと同様のものであるが、蓋器の鰭いづれも上寄りに二つの平鑿の刃先のやうな突起がつく點に違ひがある。

これら(3)(4)の器から鰭をとり拂つた形を觀察すると、卣②のb欄に配した器と全く同様なシルエットが見出される。もっとも足の型式には相違——即ち後者は尊③④⑤と同式の、ラッパの口を伏せたやうな型であるに對し、前者は尊①のやうに、下に一段臺のつく型式だ、といふ違ひ——があるのであるが、鰭の型式が鼎④、尊①のb欄に配された器と共通することと共に、この型式の器をb欄に配することの正當性を示すものである。(3)は寧郷の發見である。

(1)(2)は(3)(4)とよく似た型式であるが、(1)は蓋の甲が低いめで鰭も控えめであり、(2)は蓋の甲がやゝ高く、鰭も大げさである。(1)(2)から鰭をとり除けて見ると器の側視形はよく似てゐるが、(1)の方は足の開き出しの度合が強く、卣①(3)(4)に近い。鰭の控え目な點も鼎④(2)に近似するのでa欄に配した。蓋の側面の嘴狀突起も(2)より小ぶりである。

(2)は器の側視形は(3)(4)と比べると腹がより強く張り出してゐるが、鰭の型式はこれと全く同様であるためb欄に納めてある。(5)(7)をc欄に配したのは、卣①類の所で記した、卣は西周中期に向つて高さを減じてゆく、といふ原則から類推して、b欄のものより低いめのものを拾つてこゝに入れたのである。提梁は長軸方向に、正常な形でつけられてゐる。(1)(2)のごとく短軸

方向につけるのは、器側につけた大げさな鰭や蓋の嘴狀突起の裝飾的效果を、提梁で妨碍させないやうに、との配慮からではないかと考へられる。

(7)は鬘養の水牛の角を器表から浮き立たせ、鬘養の鼻や口なども高い浮彫にしてゐる點、尊①c欄の(13)―(15)と共通する。この器をc欄に配することが妥當であることを證するものである。(6)には全く同様な技法で水牛の角を持った鬘養を飾る隔を參考に引いた。房山琉璃河出土の伯矩鬲である。

(5)(7)につく鰭をみると、(1)―(4)で平鑿の刃先のやうな形をとって、何か人を近づけない威力を發散する道具だての一つとして役立ってゐた突起が、割箸の先のやうな鈍重な形になり變つて殘存してゐる。

d欄に示したのは鰭が透し彫の羽根の形に表はされたもので、この形の鰭は尊①のd欄の器にあつたものである。(8)には(7)にみたごとき水牛の角をつけた鬘養が飾られてゐる。最大徑の位置が低く下つてをり、全體にひしゃげたやうな形を持つてゐて、尊①のd欄の器に對應してゐる。

尊④は③(1)(2)と同様、提梁を短軸方向につけ、大げさな鰭や蓋の嘴狀突起においてもこれと共通するが、器腹に大きく鳳凰を表はし、その上部を直條紋で飾る點に特色をもつ類である。(4)―(7)に示したのは、そのうち蓋が極端に甲高で、身にかぶさる部分も高く、そこから突き出る嘴狀突起も巨大化した類である。足の下部に高い圓筒狀の臺がつく點、尊①の(13)(15)と共通する。(7)は器側から長い枝狀のものを突出させ、そこに獸頭をつける――尊③c欄所引の伯矩鬲の蓋にも同様な獸頭がある――など、(4)―(6)の器の大げさな鰭や嘴狀突起の外方への指向性が更に強調されてゐる。この點も前引の尊①(13)(14)の大げさに突出する裝飾と共通する性格をもつ。これらの點からこれをc欄に配した。極端に甲高の蓋は、すぐ次に尊⑤⑥に引くごとく、d欄に配さるべき尊に觀察される所である。今の(4)―(7)の甲高の蓋をもつた器をこれと近い欄に配すべきことを證するものである。

(1)―(3)の器も、例へば𠩺③(2)器と比べて更に大ぶりの嘴狀突起や厚い鰭を持つが、蓋は(4)―(7)ほど甲高でない。また(4)―(7)の器の鰭は𠩺③(5)(7)に見たやうな、割箸の頭狀の突起をつけてゐるが、(1)―(3)の鰭の突起は𠩺③のb欄のものと𠩺④(4)―(7)のものゝ中間形と認められる。これらの點から(1)―(3)はb・c兩欄の中間に配しておいた。

𠩺⑤は𠩺③と同様、蓋上と器腹に大きく饗養をつけ、蓋の周圍、頸、足等に帶狀に鬼神紋を飾り、鰭を伴ふものであるが、全體に高いめの作りのものである。(1)―(3)ともその鰭の特徴が𠩺③(8)と共通する。d欄がそのふさはしい位置であることはいふまでもない。これらの器で注目してほしいのはその蓋である。(1)(2)(3)と甲の高さの程度に従つて排列した。𠩺①(13)(14)などにもかなり高い蓋がついてゐるが、この(3)などは特に甲高である。

𠩺⑥は𠩺⑤と同様に丈が高いめの作りの𠩺で、大きな饗養や鰭を伴はないものを引いた。𠩺⑤から鰭を捨象して比べてみれば、⑥の側視形は⑤と全く同様であることが知られよう。

これら𠩺⑤⑥は、特に夫々の(3)の蓋の甲高の具合が𠩺④のものと極めて近いことを示すために引いたものである。

𠩺⑦は引用した他の器種と銘文乃至紋様の點でつながりのあるものを拾つた雑多なものゝ寄せ集めである。

(1)は龍首渦紋身の鬼神がついてゐるので採つた。割箸の頭狀の突起のつく鰭は𠩺③(5)(7)にみる所であり、鰭を捨象した器のシルエットは𠩺①(10)あたりに近いのでc欄に入れた。

(2)は尊④(2)と同銘、同紋の器。蓋の形、器のシルエットからみると、cあたりに來さうである。

(3)は尊②(4)と同じ臣辰の銘を持つもの。器側の鰭の形、全體にずんぐりした器形から判斷するとd欄がこれにふさはしい位置である。

(4)は尊②(7)と同じ員の銘を持つもの。(3)よりも更に丈が低く、西周中期のこの欄が適切な位置である。

(6) 簋

簋①には平凸の技法で頸に帶狀に龍紋をめぐらせる類を引いた。(1)は前にも度々引いた安陽大司空村五三號墓から出土した陶製明器である。足も器も比較的丈が高く、頸に紋様帶を表はしてゐるが、紋様帶には正面に短い縦棒狀の突起と、その兩側に圓形の突起をつけるだけである。この通りの形、紋様をもった青銅器は今のところ見出されない。器も足も(1)に比べると低いが、器側の曲線、足の開き出しの具合の一番近いものといふと(2)のごとき例が見附かる。平凸の龍紋から目玉だけが突出してゐるが、(1)の紋様帶にある一對の圓形突起はこのやうな目を寫したと解釋することが出来る。(3)は(2)と近似した形をもつが、鑿が口縁に接し、大ぶりである。腹は(2)よりも圓味をもつ。これらの青銅簋の腹のふくらみの曲線は、鼎の①(3)(4)のものと全く同様である。(1)の陶簋と類似した形態を持つことと相ひ俟ち、これらの器をb欄に配することの妥當性を證するものである。この類型でa欄に配すべき器は今の所見出されない。

(4)(5)は(2)(3)よりも器側の線が直線的となり、最大徑の部位が少し低い所に下った例である。鼎①のc欄の器の器腹の曲線は、これら(4)(5)のものと極めて近い。(6)(7)は(4)(5)の深さが減じてきたもので、鼎①のd欄に對應しよう。(8)は深さが更に減じ、平べたくなった類。(9)はそれ程淺くないが、頸から腹にかけてのしゃくれ方は(7)の同様な特徴を更に強調した形であり、足の下の板狀の臺の張り出しも、(7)より更に極端になつてゐる。(9)は西周中期の銘をもつ競簋である。なほ(5)は寶雞峪泉生產隊の出土、(6)は長安張家坡一七八號墓の出土である。

簋②には器腹に大きく饗養紋をつけた類を引いた。極めて數の多い類である。b、c、d各欄に配した器の側視形は、簋①のものと極めて明瞭に對應してをり、一々説明を加へる必要もなからう。(4)―(6)は方形の臺を作りつけたもので、卣④のc欄

(4)器が方形の臺に載せられてゐるのと對應するものである。(5)の足の側には貞⑤(1)(2)の器の足に見るのと同様な羽根の透し彫の鱗がつき、寫眞ではよく見えないが、器腹の饗養の顔の中央にも同形のを並べた鱗が立ってゐる。(6)の簋の足には貞④(6)の足に見るごとき、突起の一つ附いた鱗があり、また饗養の顔の中央にも割箸の頭のやうな形の突起がついた鱗が立ってゐる。(5)(6)の器はこれらの鱗の他、鑿の上部の動物の角が大きく立體的に造型され、尊①や貞③④のc欄に認められた、立體的な繁雜な裝飾への意欲に對應してゐる。

これらのうち、(1)は寶雞桑園堡の出土、(8)は洛陽北密龐家溝の出土、(9)は凌源海島營子の出土、(11)は岐山賀家村出土の史隨簋である。

簋③には頸と足に帶狀に鬼神をめぐらせ、腹に直條紋を飾る類を拾つた。器のシルエツトで比較すれば、(1)は簋①②のb欄の器に、(3)(4)は同じくc欄の器に對應する形態をもつことが知られる。d欄には直條紋をもつ適切な例がないので、頸と足の紋様が(1)(3)と共通する所から、そのない器(5)を假に配した。

(2)は器側のふくらみからみるとb欄に入りたい所であるが、大げさな耳の立つた鑿上の動物の頭や高い圓筒狀の臺のつく足は、簋②のc欄の器に對應してゐる。b、cの中間形といふことで兩欄の間に配した。

銘文のある器を示せば、(1)は戊辰簋、(2)は康侯簋である。

簋④には紋様、銘文において他器と關聯のあるものを雜多に寄せ集めてある。

簋には貞③④のごとく突起のついた鱗を器側につけるものは減多にない。(1)(2)はその稀なうちの若干である。鱗についた突起の形が平鑿の双先のやうな形に近い所からb欄がこれにふさはしい位置である。

(3)は宜侯矢簋で、平たい器に四の鑿をつけた珍しい形をもつ。足の側についた透し彫の羽根の形の鱗は簋②(5)、貞⑤(1)―(3)

にみる所であり、足が高いものであること、下の臺狀の部分の張り出し具合は簋①②のc欄の器に合致してゐる。

(4)(5)も器の側視形が簋①②のc欄の器に合致してをり、c欄がそのふさはしい位置であることが知られる。(4)は大豐簋である。(5)の足には(3)にみたのと同式の鰭があり、寫眞ではよく見えないが、正面中央にも鰭があつて、足にあるのと同式の羽根形の單位を並列した形をもつ。この龍首渦紋身の鬼神は、さきに尊②(3)、卣⑦(1)に引いた器にもあつたものである。

(6)は四つの鑿に大きな立體的な角をつけた動物頭がついてをり、器には乳が突出する。この器から突出物を捨象してみると、c欄の器のシルエットが出現する。この欄がこれにふさはしい位置である。(7)には鑿を飾る大きな動物頭の他に、更に小型のものが附加され、器から突出する乳は(6)よりも更に長大であり、足も高い。このごてごてした飾りの、これでもかこれでもかといふやうな繁雜さは卣④(7)に對應するものである。従つてc欄がこれにふさはしい位置である。

簋はこゝに引いた以外にも紋様の點で變化に富むが、(8)には一つだけ、頸に鳥紋をつけるものを引いた。器の側視形からd欄にふさはしい。作父癸の銘をもつ。

簋②③④に引いた類は、いづれも西周中期までは傳統が續かない。(9)(10)には代りに西周中期に新たに出現する有蓋の型式の器を引いておいた。(9)は衛簋で穆王二七年の作とされるもの、⁽⁷⁶⁾(10)は条簋である。

(二) 編年表 a—d の年代づけ

(一)において殷周交替期前後に使はれた青銅器中から、或程度の期間使はれつゞけた紋様をもつ類を主に、その變遷を段階づけてみた。その結果、a—dの各段階に、同一器種内で裝飾の種類や技法を異にする類を通じ、各段階において形態の特徴に共通性が存在するばかりでなく、異なつた器種同士でも同様な事實の觀察されることが明かになった。b段階における、容器の部分の圓味のある程よいふくらみ。器全體の姿の安定した威嚴のあるプロポーション。一部で行はれた、威嚴を強調する厚い鰭の附加。a段階における、b段階の程度には至らない、未だ控え目な表現型式。c段階における容器の部分の圓味の喪失

への第一歩。器各部の均合のくづれ。器の外方への突出のむやみな強調。d段階における全體にひしやげたプロポーションへの愛好。その時期に一部で行はれた透し彫の華美な鑄の附加、等々である。

こゝに引いた各類は、尊の②その他雑多なものを寄せ集めたものを除き、或ひは平凸の技法で紋様を器の一部分に帶狀に表はし、或ひは高凸の技法で紋様を器の全面に表はす等々、夫々異なつた裝飾技法に對應する所の、異なつた傳統をもつた工房の製作物であることが當然想定されるし、それらは地域的に近いこともあつたに相違ないが、また相互に遠くへだたつてゐたことも、後述のごとく一部でその蓋然性が考へられるのである。それらの異なつた工房の製作品と想定される各類を通じ、各段階毎に共通の特徴が看取され、一定の傾向をもつて變遷してゆく各段階のいづれかにこの異なつた工房の製作物を歸屬せしめることに成功したといふことは、青銅器の編年においても、考古學において土器の編年研究に際して前提される原則、即ち同一文化の地域においては同一の時期には共通の形態の特徴をもつた器が作られ、それらは時代と共に變遷してゆく、といふ原則の有効であることが證された、といふことである。

殷周交替期前後の青銅器には多くの器種があり、そのうちでまた紋様の種類、表現技法を異にする各類が數多ある中から、こゝに説明の便宜のために合計二十餘の類を引いたのであるが、それらの研究によつて器種や紋様表現技法を異にする類を通じてa b c dを経て西周中期に至る變遷の段階の存することが知られるに至つたのである。それではこれら各段階のどこらあたりに殷周王朝の交替があつたであらうか。(一)の編年表の説明の中に、各類毎に重要な銘文をもつた器を書き出しておいたので、金文について素養のある讀者は既に認識されてゐるはずであるが、それはbとcの間でなければならぬ。西周であることの明かな銘文は大多數がc d段階の器につけられてをり、遡つてもb cの中間型式までである一方、例は少ないが殷時代の確證のあるもの、及びほとゝ殷と考へて差支へなさうな銘文は、いづれもb段階の器につけられてゐることからさう知られるのである。金文に詳しくない讀者のために、それらの銘文について簡単に説明を加へておかう。

便宜上數の少ない殷のものは後に記すとして、まづ壓倒的に多い周のものを引く。

鼎①(5)送鼎——作器者の送は、後述の簋②(2)の康侯簋に出てくる潘司土送と同一人物で、兩者はいづれも銘に同一の圖象記號をつけるが、康侯簋銘は後述のやうに周初のものである。⁽⁷⁶⁾

鼎①(6)旗鼎——銘文に「王姜が旗に……を賜ふ」とある。この王姜は例へば史叔楸器に「惟れ王宗周に率し、王姜が……」と出て來て、明かに周の早い時期に活躍した重要人物であることが知られてゐる。⁽⁷⁷⁾

鼎①(10)大孟鼎——銘に「惟れ九月、王宗周にあり、孟に命ず、王したがりて曰く、孟よ、不顯なる政(文)王は天の有する大命を受け、珌(武)王にありては云々」とあり、こゝに出て來る王が武王より以後の王であることは問題ない。⁽⁷⁸⁾

方鼎⑧(8)作冊大方鼎——銘に「公東が武王成王の異(祀)鼎を鑄る」とあるから、周の成王の死より後の作であることが知られる。⁽⁷⁹⁾

鬲鼎①(6)獻侯鬲鼎——銘に「惟れ成王大いに率し、宗周に在り」といふ。周の成王時代のものであることは疑ひない。⁽⁸⁰⁾

鬲鼎②(3)匱侯旨鬲鼎——銘に「匱侯旨初めて宗周に見事す」とある。⁽⁸¹⁾匱侯が匱に封ぜられた後初めて宗周に朝見したのか、侯の旨が代替りの後初めてさうしたのかは問題だが、周代のものであることは問題ない。

尊①(13)弼尊——銘に「惟れ王初めて成周に鄼す、武王の……を何々し……惟れ王の五紀」とある。⁽⁸²⁾唐蘭は銘文の鄼の字を遷と讀み、この銘を周公の攝政期間終了後の成王親政の五年のことと考へ、馬承源は鄼を遷と讀み、城壁を築くことと解し、この銘の五年を成王が踐祚して五年目(周公攝政の五年)と取る。⁽⁸³⁾どう數へようと周の成王の早い時期である。

尊①(16)令尊、②(20)令方彝——銘に「……王周公の子明保に命じ……明公朝に成周に至り」とあり、⁽⁸⁴⁾周のものであることは問題ない。

尊②(2)麥尊——銘に「侯周に見す……葦京に酃祀す」と周およびその祭祀の地葦京が出てくる所より、これが周のものであることは疑いない。⁽⁸⁵⁾

尊②(4)臣辰尊、⑦(7)臣辰卣——兩者同銘で「惟れ王大いに宗周に命ず……成周に殷せしむ……」とある。⁽⁸⁶⁾これも周代のもの

のたること問題ない。

尊③(10) 潘伯送尊——銘文に出てくる作器者潘伯送は先の鼎①(4)の送、後引の康侯簋の潘司土送と同一人物で、またこの銘にも兩者と同一の圖象記號がある。⁽⁸⁷⁾ 康侯簋と同一時期の作である。その項を参照。

尊③(11) 敝土卿尊——銘に「王新邑に在り、初めて何々す」とある。新邑は『尙書』の召誥、洛誥にも出てくる、成周を指す語で、成周が建設されて間もない時期の稱と考へられてゐる。⁽⁸⁸⁾

尊④(4) 復尊——銘に「匱侯復に……を商(賞)す」とある。この器は房山琉璃河の出土品であるが、他にも北京近郊で匱(燕)侯に言及する青銅器の出土が少くなく、司馬貞の『索隱』に記される北京近邊が『史記』に武王が召公を燕に封じたといふ燕の地であつたとの説が裏づけられてゐる。⁽⁸⁹⁾ この尊が周代のものであることは疑ひない。

卣①(12) 作冊鬲卣——銘に「……王厝に在り、王姜作冊鬲に命じて……」と王姜が出てくる。⁽⁹⁰⁾ 王姜は鼎①(5)の所に記したごとく、西周の早い時期に活躍した重要人物と考へられてゐる。

卣①(14) 遣卣——銘に「王厝に在り」と記されるのは、作冊鬲卣の同じ句と同一の事件を指すと考へられてゐる。兩者の銘文の字體が極めて近いことが注意されてゐる。⁽⁹¹⁾

卣③(6) 伯矩鬲——銘に「匱侯は伯矩に貝を賜ふ」と匱侯に言及してゐる。⁽⁹²⁾ この器は房山琉璃河出土であるから、尊④(4) 復尊と同じ理由で、これは西周のものと思われる。

簋③(2) 康侯簋——銘に「王商邑を□伐す。こゝに康侯鬲を衛に命ず。潘司土送および鬲はその考の隱彝を作る。圖象記號」とある。⁽⁹³⁾ 商邑を伐つとあり、またこの銘に衛に命ぜられたと記される康侯のことは『尙書』康誥に出てくる、等より、これが周のものであることには異論がない。

簋④(3) 宜侯矢簋——銘に「珣(武)王成王の商を伐つの圖を何々し」とあり、周の成王ないしそれより後のものであることが知られる。⁽⁹⁴⁾

簋④(4)大豐簋——銘文中に「丕顯なる考文王」の語があり、周の武王時代のものといふことになる。⁽⁹⁵⁾

以上が表中に引いた器で銘文に周代のものたる動かない證據のあるもの。一部はb c 兩欄の中間に上るが、大部分はc 欄に入る。

次に殷の例。

簋③(1)戊辰簋——銘に「戊辰(の日)……十月一(十一月)にあり、惟れ王の廿祀、魯日、妣戊・武乙の爽に遘す」とある。武乙はいふまでもなく殷の最後から數へて四番目の王。その爽(妃)の妣戊に對する遘の祭祀を行ったといふのである。このやうな王室の祖先に對する定例的な祭祀が殷王朝によって行はれてゐたことは殷虛の卜辭によつてよく知られてゐる。このやうな祭祀が殷王朝滅亡後一諸侯となり下つた後繼者によつて行はれつづけたことも十分あり得るとはいへ、堂々と銘文に記してゐる所から見て、殷王朝滅亡以前のもとの見るのが穩當と思はれる。この廿祀を董作賓⁽⁹⁶⁾は殷の最後の王帝辛の廿祀に當て、彼の復原した祀譜の帝辛廿祀十一月の戊辰は丁度銘にある通り魯祭の行はれる日に當ると言つてゐる。

卣①(9)小子囂卣——銘の終りの方に「人方」が出てくる。これは殷末の卜辭にそれを征伐することを占つたものが多く、この銘も殷末のものであつて周には降らないことはほぼ確かと思はれる。またこの銘は「子某」が「小子某」に物を賜ふといふ内容のものであるが、これは後引の子光尊の條に引くごとく、この銘を殷と考へる判斷に傍證を與へる事實である。

以上が銘文によつて殷のものたることほど疑ひない例である。他に從來殷のものとしてされるが、さう見ると殷時代の條件によく合ふものが若干ある。

鼎①(4)戊嗣子鼎——後述四四頁參照。

尊①(5)子光尊——銘に「子光が小子啓に貝を商(賞)す」といふ。殷代の卜辭に子、小子、小臣が現れ、子某が小子某に賜りものをする型式の金文に出てくる子、小子も同じ一連の社會組織を想定して解釋されてゐる。⁽⁹⁷⁾

尊⑥(3)宰橈角——この器の細い凸線によって表はされた夔夔紋は、尊⑥(1)(2)に示した尊と全く同じで、この角と尊は同じ工房で、恐らく同時に製作されたものと認めて差支へなからう。この宰橈角は銘文に「庚申(の日)に……六月に在り、惟れ王の廿祀、翌(の祭りの日から)また五日たった日」とある。祭祀を日付の記載に使ふ風は、この「翌」も含めた五種類の祖先祭祀が一定のサイクルで行はれてゐた殷時代に行はれたことが知られてゐる。それが殷滅亡後になくなったかどうかについては明かでない。

以上、表に引いた器のうち、殷時代のものであることがほとんど疑ひないものは最初に挙げた二器だけである。それ以外のものは、銘文の型式、内容によってそれが殷時代のものであることが證される、といふよりも、逆に、その銘のつけられた器がb欄に配されることにより、その銘が果して殷時代のものであったことが證された、といふべきものである。例へば鼎①(3)戊嗣子鼎を郭沫若が殷時代のも⁽⁹⁸⁾と考へたのに對し、劉克甫(クリュコフ)はこの鼎銘は用字、用語上殷的な特徴と共に周的なものもあることに注意し、更にこの鼎の型式が康王時代の大孟鼎と近似すると見、伴出の青銅戈の型式も併せ考へてこの鼎を殷滅亡後、その餘民によって作られたものと考へてゐる。思ふに、これはこの鼎と大孟鼎は形態、紋様において確かに同じ類型に屬するが、先に見たごとく發展の段階を異にしてゐることを見落した議論である。この鼎は筆者の型式學的研究によってその殷後期への歸屬が確認されたわけである。この戊嗣子鼎に「甯の何とかに在り」とあるのについて郭沫若は、この地名なし宮室名は、前引宰橈角に「王齋間に在り」といふのと同じ事件を指したと見て、兩者を同時代のも⁽¹⁰⁰⁾と考へてゐる。問題の鼎と角が同じくb欄に配され、同一時期のも⁽¹⁰⁰⁾と知られた所から、前引劉氏の反論に反し、この郭氏の解釋も裏づけを得たことになる。

先の編年表で大司空第四期後期に屬する安陽大司空村五三號墓の陶製明器を引き、その原形となつたと思はれる青銅器がいつれもb欄に分類されることを示した。このことによつてまたはじめて大司空第四期後期が、その絶對年代において殷の最末期に屬することが證されたわけである。大司空村の土器の期分けは、考古學の方法によつて相對的前後關係が決められたの

であるが、その最後の段階が殷のおそい時期に屬するのか、或ひは周に入るものであるのかは未確定であったことを忘れてはならない。

以上見た所により、bとcの兩型式の間に殷周兩王朝の交替があったことが證された。先にも引いたごとく、形態上中間的なものも若干あり、また同銘で同時製作の器でも、例へば岡規尊はb欄に、岡規卣はc欄に分類されるといふやうな事例もあるのであるが、殷の最末期のbと西周の早い時期のcとは截然と分けることが可能な、明確にして判明な型式を形成してゐることは、さきの分類表で明らかである。カールグレン氏の想定したやうに、⁽¹⁰⁾殷周交替期に同じ型式、同じ紋様の器が長期にわたり——百年ほども——保守的に作られたどころか、通常の考古學者なら誰でもが豫想するはずであるごとく、青銅器の型式、紋様とも急速に變化を遂げていったのである。前掲の表には、型式變遷の跡をたどるために、なるべく長い期間にわたって作られつづけた類を拾ふやうにとめたのであるが、それでも同じ器種で同じ紋様を同じ方式の技法で飾る類はさう長期にわたって存続するものではなく、どうしても例が一つ乃至二つの段階に集中してしまふのが常態である。表に示した器でも一つ乃至二つの段階にしかなく、上下の欄に埋めるべき事例が缺如したものが多いことは、先に見た通りである。例へば大きな鱗をつけ、大きな耳と太い足をもった鼎は、a b二欄より他になく、腹に大きく饕餮をつけた鬲鼎は大部分がb c二欄に入つてしまふ、等である。

殷周青銅容器の中には、時代の推移に伴ふ新しい器の種類の出現、從來の器種の消滅も勿論あるのであるが、別に鼎や簋のやうに殷周を通じて長く作られつづける類も勿論多い。然し一定の形態を持ち、特定の紋様を一定の技法でつけたものといふものは、いはゞ甲骨文字の各期の書體のごとく、別に中間形もなしに時期時期でころつころつと變化する方が常態だと言つてよいのではないかと思はれる。これについては將來殷周青銅器のすべての器種について年代別に呈示する形で讀者に明かにする必要があらうが。兎もあれ、殷周交替期に同型式の、同じ紋様の青銅器が長期にわたって保守的に作られつづけたといふか

ールグレンの謬見に、世界の研究者達は何と長い間呪縛されつづけたものであらうか。

さてb c兩段階の間に起ったことが知られた殷周の王朝交替の年代であるが、周の武王が殷王朝を滅ぼした年の絶対年代については、現在残る伝統的な年代記によって確認することはできず、いろいろな方法で推算が行はれてゐて、前一二世紀末から前一一世紀末に至る間の年代を當てる諸説がある。筆者は「武王が殷を滅ぼしてより幽王まで凡て二五七年」とする『竹書紀年』により、それを一〇二七年とする陳夢家の説が妥當と考へる。⁽¹⁰²⁾これによってa—dの型式變遷の中に、一應の絶対年代の一點が得られることになる。

所で、考古學の遺物の發展段階としてのa b c dの各々を、一つの期として設定すべきか、或ひはもう少し大まかに幾つかをまとめて一つの期とすべきかの問題が残つてゐる。幾つかをまとめて一つにするとしたら、どうまとめるべきであらうか。考古學の遺物の型式の變化してゆく趨勢は、必ずしも政權の交替に合せて節目ができるとは限らないから、殷周王朝の交替は一應考慮の外にして、限られた材料ではあるが先の表に示した類についてこの問題を考へてみる。

前掲の表をみると、a乃至bに始まつてc dへと、段差なく變化してゆく類がある。鼎①②、鬲鼎①②、尊③④、卣①、簋①②③などである。各段階間の差異は、不注意な觀察者であれば見落してしまひかねない程度のものである。これらを見ると、強ひて殷周王朝の交替に期の分れ目を設けず、a乃至bからdまでを一まとめにして殷周期といった期を設けた方が便宜かとも思はれる。

一方、殷周の交替期を越えてa bからc dへと變化してゆく類でも、bとcの間に鱗の形や各部分のプロポーションに目立つた變化の現れるものもある。方鼎、尊①、卣③などがその例である。饕餮紋とか鱗、足の下低い圓筒形の臺など、使用される道具だては同じでも、それによつて表現されてゐる理念の點からいへば、變遷といふより革命といった方がよい態の變化である。これらは便宜上同じ類の中に一系列として並べてあるが、bで傳統が途絶え、b段階の遺物を參考にして新たにc欄

の器が創作されたと見る方がよいかも知れない。さうすると、これらの類のb欄までの器は、鼎④、卣②のごとくbで傳統の途絶えるものと同じ類として扱ふべきであらう。b、c兩欄の間に傳統の斷絶があることは、またc欄に始めて出現する類が幾つもある事實によつても看取される。卣④⑤⑥、簋④⑥⑦などがそれである。

かうみると、やはりbとcの間、殷周王朝の交替を境に、考古學の期の區分を設けないと不自由だといふことになる。始めに引いた、こゝに期の區分の不必要と思はれる類と、設ける必要のある類の存在をどう解釋すべきかについては後に四三頁以下に再び觸れることになる。こゝには期の區分の技術的な問題だけに止めておく。

さて殷の晩い時期に當るa及びそれ以前の時期の遺物については、この論文では必ずしも十分な資料を引いてゐないので、どこにa bを含む期の始まりの區劃を設けるべきかについては深く立ち入ることができないが、差當りa bを殷末期様式と呼ぶことにしておかう。

次にc、dの二欄であるが、これが次に様子ががらりと變り、特徴のかなり明瞭な群を構成する西周中期式に對し、西周前期に當てるべきことは改めていふまでもない。またc欄の器に、例へば尊①や簋②③のごとく、次のd段階には存在しなくなる、特色をもつたものがある一方、c、d兩欄に分類した器の中には、前に記したやうに多くの中間的な形態があつて、並べてみるとなだらかに移行し、c dに分けることが必ずしも容易でない類もみられる。c dをまとめて一つの期としておいて、c、dに分けうるものはその早い時期とか晩い時期とか呼んだ方が好都合である。そこでc dをまとめて西周前期様式と呼ぶことにしたい。

(三) 編年表によって考へられる若干の見通し

(1) 青銅器紋様、銘文の變遷

以上によって、殷の末期から西周前期にかけての青銅器の型式變化の趨勢が、こゝに引いた限りの若干の類について、絶對年代による年代づけと共に明かにされたのである。第二章において批判したやうに、從來主として銘文のある青銅器といふ限定された資料により、研究者が各自頭の中に器の様式變遷の圖式を想定し、それに基づいて青銅器の、或ひは銘文の年代について論ずることが行はれて來たのであるが、これは止めにしなければならない。この論文で例證として引用した若干の類だけについて試みた方法を、すべての器種に對し、各類にわたって適用し、殷周青銅器の型式學的編年作業を行ひ、その基礎の上で論議を進めるべきである——この作業は筆者が近く公表すべく、準備中である。

或る時期に多く使はれる器形、或ひは紋様の種類や表現技法などは、この作業の結果として自ら明かになることである。この論文に引用しただけの材料をもつてしても、讀者は同じ時期にどのやうな異った紋様の種類や表現技法が平行して使用され、また或るものは限られた期間を経たのち使はれなくなる、といふやうなことが具體的に頭に入つたことと信ずる。こゝに示した研究手續きを總ての殷周青銅器資料に適用することによって、器の形態の或る特徴、或ひは特定の表現技法をもつた特定の種類の紋様が、或る時期に獨特のものであることが明かにされれば、⁽¹⁰⁴⁾考古學の訓練を受けてゐない研究者でも、器の時期の判定が相當程度にできるやうになるはずである。

また銘文の文字の字體、字配り、記述の型式等の變遷も、銘文のつけられた器物の年代的位置づけがこの器物の型式學的研究によって明かにされれば、それに附隨して自ら明確な形で浮び上ってくる。この方法によって青銅器銘文の字體等々の變遷が明かにされれば、銘文のつけられた器そのものを見なくても、その年代を判定することができ、また必ずしも専門の研究者

でなくてもその作業ができるやうになるはずである。

このやうなことは改めて記すことがない程に當然のことであると思はれるが、正常なる手続きをふまない、従つて十分に證明されたものでない紋様ないし銘文の年代についての意見が研究者各人各人によつて懷かれ、それによつて議論がなされた期間が餘りにも長すぎたやうに思ふので、改めて指摘する次第である。

(2) 殷周間における青銅器の傳統の繼續と斷絶

別刷の表を一覽すれば知られるやうに、殷末から西周前期には、異なつた表現技法、異なつた種類の紋様が併存してゐる。かういつた事實をどう解するかについては、カールグレンが以前に正面から取り組んでゐる。⁽¹⁰⁶⁾ 青銅器の研究者であれば誰でも知つてゐることであるが、彼は殷、西周の青銅器の紋様の要素をA B Cの三群に分けた。Aの要素は1、顔だけの饕餮、2、身體のつく饕餮、3、牛角の饕餮、4、蟬紋、5、下向の龍、6、器面全體の紋様。Cの要素は1、變形饕餮、2、龍化した饕餮、3、胴のつく龍、4、嘴のある龍、5、下顎をもつ龍、6、顧首の龍（下略）。Bの要素は1、散開饕餮、2、細線の龍の帶紋、3、尾の分離した鳥、4、目雷紋、5、目を中心とした斜雷紋、6、連珠紋（下略）。かういつた雜然たる混成の群である。そしてAはA同士またはCと、BはB同士またはCとしか伴はず、AとBとは少數の例外を除いて共存しない、といふのである。そしてAとBのこの關係を様式の違ひと解し、兩者の歴史的關係についてはあれこれと可能な解釋を検討した後、A式は殷初期に榮え、後に衰へ、B式はA式より派出したが、殷後期にはAより優勢になつた。周前半にはA B併存の形勢を受けついで、といふやうな凡そ齒切れの悪い漠然たる結論を出してゐる。こゝには詳細に紹介して批評を行ふ餘裕はない。研究方法の點から一言いふと、殷西周の青銅器を一括的に扱つてその紋様要素がA B C等々複數の組合せの類型に分類できる、といふのならわかる。然しA Bの二つと、兩者に共通に組合はさる中立のCといふものに分けられる、といふのでは、全體分類としての體をなさない。従つてそれを出發點とする一見論理的にみえる議論も、全く不毛なものに留らざるをえないのであ

る。

表に示したごとく、器の形態の特徴によって分類を試みれば、同時代にどれだけの種類の類型が併存し、或ひはそれが存続し、或ひはそのうちのどれどれが消滅する、といふやうなことは、議論の餘地のない形で出てくるのであり、どういふ表現技法の紋様要素のどれどれが組合さつて群を形成するかについても、容易に歸納することが可能である。例へば細線平凸の技法で頸に帶狀に龍紋を飾る器は、こゝに引いた例でいへば鼎②でb——西周中期、簋①でb——西周中期に例がみられ、時期的にも合致し、明瞭に一つの群を形成してゐる。また器側に厚い鰭をつけて威嚴をそへる鼎④がb段階に止り、尊①でも同式の鰭はbにおいて併行するが一部cにも存続、卣③④においても同様な事實が認められることも、これらが一つの群を形成することを示すものである。

右に二つの例を引いたとき、器種を異にする類を通じての紋様の表現技法、種類の共通性、ないしは裝飾の理念の同一性によつて結合される群を、假に流派と呼ぶことにするが、異なつた流派の併存ないしはその消長をどう解釋するかは、興味深い次の研究課題の一つである。

この問題は當然すべての器種にわたつて、また更に長い期間の材料について型式分類し、年代づけを行つて後に扱ふべきものであるが、問題の所在を指摘したついでに多少立ち入つておけば、後に引いた方の流派についてはかう解されよう。即ちこれは殷王朝末期に、殷王朝のもとに創られた様式であるため、その時期に完成した形をもつて出現する。周が天下をとるとその工人は周に引きつがれたが、新しい成り上り者の一部支配者の趣味にそふべく、全體の姿のバランスをくづしてまでも、その威嚴を誇示する突起物を巨大化して表現した、と。

また前に引いた方の流派は殷末期から西周中期まで連續して間斷がない點が注目し價する。他にも同様に連續する例があることは先に三九頁に引いた通りである。これらは周王朝の支配者層の間によく根づいた流派であつたことを示すと解される。これらの流派の工人は、周が殷に勝つて後に周の支配者に引きつがれ、その作風が新しい支配者の趣味によく合つたので長つ

ぎした、といふことも當然考へられる。一方、この類の流派のうちには、周の支配者が殷に勝つ前から、彼等のために青銅器を作つてゐた關係上、周の支配者の間によく定着したのだ、と考ふべき有力な情況證據が存在する。それは安陽圓坑の發掘例である。こゝから出土した青銅容器は鼎①(4)と卣①(7)で、いづれも殷末期のⅡ段階に屬し、その類は西周前期へと傳統が引きつがれてゆく類に屬する。ところでこの坑からはクリュコフも注意してゐるやうに、⁽¹⁰⁶⁾周時代に廣く使はれるに至る型式の戈が伴出してゐる。そしてこの坑には頭の側に鼎①(4)の戌嗣子鼎の置かれた側身屈肢葬の人物の他、額の骨に傷があり、明かに殺されて放り込まれたことの知られる人骨、頭骨だけの五體分等、子供を含む二五體が上層に、また下層にも手を縛られて放り込まれたと思はれる者等、同じく殺されたい人骨二九體が亂雑に埋められてゐるのである。⁽¹⁰⁷⁾祭祀の犠牲として殺されたか、或ひは捕虜になつて、或ひは罪に問はれて一族郎黨殃殺しにされたか、いづれにしても同出の武器からみて、周の人が殺されて放り込まれてゐる氣配が濃厚である。こゝで直ちに思ひ起されるのは『史記』殷本紀の「紂が西伯を羑里に囚した」といふ條の『正義』に引かれる『帝王世紀』に「文王（西伯のこと）を囚す。文王の長子を伯邑考といふ。殷に質となり、紂の御となる。紂烹て羹を作り、文王に賜はる云々」といふ話である。西伯（死後に文王と諡さる）は幸ひに歸してもらへたが、その長子は殺されたといふ傳説があるのである。紂には九侯、鄂侯を次々と殺したなど、殺伐な性格が傳へられる。圓坑に埋められてゐるのは、西伯の長子のやうな運命に遇つた周の族長と、一緒に族滅されたその家族、家臣であることは大いに考へられることである。殺された事情は兎も角、こゝに埋められた青銅容器は、周が殷に勝つて天下を取る前の、周人のものであることは、伴出の戈からみてもほゞ疑ひない所である。

その他、そこから出土したからといつてその地で作られたものといふことは決して言へないとはいへ、先に引いた例で殷末期に屬する鼎②の(2)が耀縣、尊③(4)が靈臺から出てゐる他、Ⅱ欄に入る器で表に引いた中でも、簋②(1)が寶雞、尊⑤(1)が耀縣、(2)が岐山の出土であるなど、例が少なくないことは、それらが總て殷末期に周の境域外で作られてそこにもたらされたとは限らず、その地でそれらの製作が始まつてゐたと考へる方が、殷に周が勝つて後の、周の支配者層への定着の狀況がよく説

明されるやうに思はれる。とはいへ、これは當然鑄造遺蹟の發掘等、考古學的證據によつて最終的に決着をつけるべき問題である。⁽¹⁰⁸⁾

註

- (1) 水野一九五三
- (2) 同右、第一、第二章。第一章前半は容庚一九四一、第四章の始めの方がその種本である。
- (3) 郭沫若一九五七、考釋三四、一六五葉
- (4) 羅一九一七
- (5) 馬衡一九二八
- (6) 水野一九五三、八一頁
- (7) Karlgren 1936
- (8) 同右、二二頁
- (9) 同右、一九一—二〇頁
- (10) クリールは (Greil 1936) カールグレンの殷銘文辨別法について次のやうに批判してゐる。即ち、カ氏はその言ふ所の「周時代の標準」について何も説明せず、問題の三種の記號を持つ銘文が、周たることを示すものは何も含まないといふことについては、證明しようとして、權威によつて論じてゐる。また周時代の證據のないものは總て殷だといふことが言へないことに注意してゐない、と (四六七—八頁)。これはその通りである。クリールは更に銘文の字體、寶隣彝、日乙など「日」字をつけた十千の祖先名など、周代たることを示す標準について論及してゐないことに不滿の意を表してゐる (四六九—七〇頁)。ただしクリールも「寶隣彝」の句を持つ銘が周のものだといふことについては劉節の權威に頼り (四七〇頁)、またカ氏が殷とした器のうちどれ位は自分も殷のものとして認めるかについては、自己の「印象」に頼るなど、そのカ氏批判にもいささか頼りない點が幾つか認められる。
- (11) 水野一九五三、九一頁

(12) Karlgren 1948

同右、三二頁。水野氏前引論文より後に發表されたものであるが、カールグレンは殷代工人の傳統に縛られてゐたことについて、更にくはしく論じてゐる (Karlgren 1962)。即ち、過去において自分の行つた「殷周期」青銅器の A、B 及び中立様式 (C) の分類法に、更に器種と A B 各様式との關係をも併せ研究した Marginalia on Some Bronze Albums I, II, III (BMFEA no. 31, 32, 34, 1959, 60, 62) の所論を要約したのち、次のやうに考へる (一〇頁)。即ち、殷の青銅器作家達は器形の選擇、紋様や紋様要素の配置において、びつくりする程の一連の傳統的な規則に縛られてゐた、と。そしてそのことを説明するために、基本的な特徴において共通する二つつの器種をとり上げ、その紋様、器形の特徴の對照表を示す。鼎と鬲、鼎と簋、有耳簋と無耳簋、有耳簋と鬲、尊と觚、尊と觶といった組が扱はれてゐる。最初のものを引いてみると次のごとくである。

	鼎	鬲
a s 字形をなす器の側視形	+	—
b 下擴がりの底の平らな器形	+	—
c 足の上端の立體的獸面	+	—
d 素紋の器腹、頸の胴體付鬚鬚	+	—
e 器腹の、下に垂れる蟬紋	+	—
f 器腹全面一つながりの紋様と足の陰線の羽紋	+	—
g 器腹全面一つながりの紋様で上の縁に一系列の渦紋のつくもの	—	+
h 蟬紋と鬚鬚の共存	—	+
i 器腹の身體のない鬚鬚	—	+

j	器腹の分散饗	—	+
k	鱗形の耳のついた饗	—	+
l	額の鱗を伴はない饗	—	+
m	鱗紋のつく角または鈎形の並ぶ羽根をつけた角、 または羽紋をつけない角を伴ふ饗	—	+

一見して知られるやうに、誠に型式的、表面的な比較で、比較すべき器の選擇、比較すべき項目の選擇に何等の規準も認められない。かういふことで比較表を作つて+(有)と—(無)の印を並べてみたのでは、カ氏のいふやうに、この相違は「誠に高度に奇妙」であり、「それのみをもつては説明し難く」「我々に未知な安陽期以前にそれが起原する、純粹に傳統的なもの」(一一頁)とでもいふ他なからう。

ソーパーは(Soper 1966, 三三頁以下) カールグレンのいふこの説明のつけにくい傳統的な規則なるものの一部は、一方においては年代の相違によつて、一方においては青銅器作家の美的な關心によつて説明されると考へてゐる。確かに、先に引いた例でいへば、例へばaは兩鼎にはないがその前身である兩には出てくるものであり、またcとdはこの論文第三章(4)、(2)節に記したごとく、年代と共に製作者の傳統に根ざす問題である。gについても兩鼎といふものは、一定の器種の製作集團によつて限られた時期に大量に作られた器種であるが、この集團によつて特に多く使はれた紋様として説明される。なほbに至つて、器形の定義上兩鼎にあり得ないもので、ここに比較の標準として取り上げるのが間違つてゐる。

(14) 中にカ氏の標準での周代たるの證を缺く例(p. 50. 1, pl. 51. 2)等も引かれてゐるが、ここには一々指摘しない。

(15) 水野一九五三、九五—六頁

(16) 容庚一九四一

(17) 水野一九五三、八三頁

(18) Chen 1946

(19) 同右、四六頁

(20) 水野一九五三、八四頁

(21) 容一九四一、上三一頁

(22) Chen 1946 四七頁

(23) 輝縣琉璃閣で盜掘された殷代の玉器、青銅器は支那事變中北京で「安陽物」として賣られてゐた(中國科學院考古研究所一九五六、一四四頁)

梅原未治氏は『河南安陽遺寶』(梅原一九四〇)の例言に、殷虛出土と傳へられる物もその所傳に疑はしいものが多いが、その本に收録したものは、同氏が昭和十一年四月、南京の中央研究院で傅斯年、李濟等關係者の好意により、殷虛の學術發掘品の殆んど總てを見學することができた、その時の知識を標準にして嚴選したものである旨記してゐる。この書物の圖版三六にのせられた鳥形卣は、同じ梅原未治氏の編纂した『白鶴吉金選集』には(梅原一九五一、圖版四)「傳河南省濬縣出土」としてかかげられてゐる。氏の鑑識眼による「嚴選」の一端をうかがふことができよう。

(24) それを適用した『考古圖』四、五の卣のやうな場合にはわざわざ明記してゐる。

(25) Chen 1946 三三頁

(26) 水野一九五三、一〇〇頁。このやうに引用される器のうち圖版に示されるものは殆んどなく、『商周彝器通考』『鄭中片羽』『嚴窠吉金圖錄』等々、多數の希購書を手許に置かない限り、全く理解する手だてではない。筆者もこの度人文科學研究所の考古學研究室でこの藏書を頼りに始めて引用書に一々當りながら丸一日かかつて讀むことができたのであるが、恐らくこのやうな便宜をえてこの論文を理解することが出來た者は世界中で他にないのではなからうか。

(27) 水野一九五三、一〇五頁

(28) 同右

(29) Kane 1973

- (30) 同右、三四〇頁以下
 (31) 董一九三三
 (32) この點についてはソーパーが (Soper 1966, p. 28) 注意し、この母戊を武乙の妃に當ててゐる。
 (33) 于一九六四
 (34) Loehr 1963
 (35) Kane 1973 三四二頁
 (36) 葛今一九七二、圖四、六
 (37) 程一九五九
 (38) 陳一九五五
 (39) 白川一九六二七五
 (40) 三葉
 (41) 郭一九五七、目錄表、目次の欄及び圖編で數へて全器の約三分ノ一
 (42) 郭一九五七、考釋、七〇葉
 (43) 同右、五二葉
 (44) 陳一九五五、(一)、七九—八〇頁
 (45) 同右、八〇—一頁
 (46) 白川一九六二七五、九輯、四九一頁
 (47) 白川氏は大豐簠を銘文の解釋から康王期とする。
 (48) 白川一九六二七五、一三輯、七四八頁
 (49) 白川一九七二、二八〇—一頁參照
 (50) 陳一九五五、白川一九七二、二七三—二九四頁。殷周革命の年は陳氏が前一〇二七年、白川氏は一二〇年代とする。
 (51) Waterbury 1942、四頁
 (52) Waterbury 1962、一一六頁
 (53) 岡田一九五三
 (54) 同右、二二三頁
 (55) 林一九七〇、三五—八頁
 (56) 岡田一九五三、二二三頁

- (57) 同右、二三九頁
 (58) 同右、二三四、二三三頁
 (59) 同右、二二七頁
 (60) 樋口一九六三
 (61) 同右、四一五頁
 (62) 例へば同右、一〇七頁、器種の消長表
 (63) 同右、一〇五頁
 (64) 鄭衡氏は「試論殷虛文化分期」(鄭一九六四) において銅器墓分期圖表を作つてゐるが、科學的發掘例のみを使用したため、筆者のb欄に當る殷虛文化晚期第七組としては、安陽の圓坑中出土の戊嗣子鼎及びそれと伴出した卣しか示すものがないことになつてゐる。
 (65) 吳、維一九七五、五八頁。銘に「惟れ王の八祀正月……王曰く、なんじ……わが皇考穆王に臣たり云々」とある。この王の父が穆王だといふから、この王は穆王の次の共王である。
 (66) 林一九七二、四五九頁
 (67) 郭一九五七、考釋五九葉
 (68) 岐山縣文化館龐懷清他一九七六、二八頁。銘に「余孽(共)王の卣(恤)工(功)を執り……惟れ王の五祀」とあり、共王五年の作と知られる。
 (69) 林一九七二、四六〇頁。
 (70) 簠で飾られた器から簠をむしろ取つた形をとり上げて他の器と型式學の比較研究を行ふことは、次のやうな理由で正當と考へる。即ち、簠で飾られた青銅容器を鑄造しようといふ場合、普通青銅容器を鑄造しようとする時と同様、まづ粘土で作らうとする器と同形の中實の原型を作つたと想定される。そして第一の段階において形造られるのは、簠のついてゐない原型に相違ない。この段階において、工人の頭にある同時代における器形の理想型がこの原型、即ち完成された青銅器から簠を除いた形に反映されることは當然と考へられるからである。

- (71) 梅原一九三三、圖版八、一三
 (72) 林一九五三、二一一—二頁
 (73) 林一九七二、四五五—九頁
 (74) 林一九七二、四五五—九頁
 (75) この簋は注(68)所引の共王五年の作器の鼎と同出で、同人の作器であるが、銘に「惟れ廿有七年……」として冊命を受けたことが記され、衛鼎(甲)に對し、これは初めて冊命を受けた時のもので廿有七年」は穆王の二七年とされる(岐山縣文化館龐懷清他一九七六、二七—八頁)
 (76) 白川一九六二—七五、四輯、一六三—五頁
 (77) 同右、六輯、二六三—五頁
 (78) 同右、一二輯、六七九—八一頁
 (79) 同右、八輯、四四五頁
 (80) 同右、七輯、三三五頁
 (81) 同右、八輯、四一四—五頁
 (82) 唐一九七六、六〇—一頁
 (83) 馬一九七六、六四—五頁
 (84) 白川一九六二—七五、六輯、二七八—九三頁
 (85) 同右、一一輯、六三一—二頁
 (86) 同右、七輯、三四一—五頁
 (87) 同右、一四輯、一六三頁
 (88) 同右、七輯、三一八—九頁
 (89) 中國科學院考古研究所等一九七四、三一四、三三〇頁
 (90) 白川一九六二—七五、五輯、二三九—四〇頁
 (91) 同右、五輯、二〇〇頁
 (92) 『中華人民共和國古代青銅器展』一五一頁
 (93) 白川一九六二—七五、四輯、一四四—六〇
 (94) 同右、一〇輯、五三三—五頁
 (95) 同右、一輯、一九—二〇頁

- (96) 董一九四五、下、卷二、三四葉
 (97) 貝塚一九三八、九四頁、赤塚一九五九、五九頁
 (98) 郭一九六〇
 (99) 劉一九六一
 (100) 郭一九六〇、一頁
 (101) 五頁參照
 (102) 陳一九五五、一—二六頁
 (103) レールの五式(Loehr 1963)のごとき抽象的な様式設定による、圖式的な發展觀の假設も無用の長物と化することになる。
 (104) カールグレンは(Karlson 1966、九〇頁以下)殷周青銅器を殷式、殷周式、中周式、淮式に分け、各々に特徴的な紋様を列挙してゐる。然し時代の分け方が大まかすぎて現代の我々の關心には役に立たない。
 (105) Karlson 1967、一一—九六頁
 (106) 劉克甫一九六一
 (107) 中國科學院考古研究所安陽發掘隊一九六一、七一頁
 (108) 殷を倒す前の周の青銅器といふものは誰れも考へてみたくなる問題である。最近ではヴァージニア・ケインは(Kane 1973、三六五—六頁)別刷表中の貞④のごとき盛大に裝飾の凸出した類は安陽の趣味に合はないと判斷し、殷を倒す前の周のものとしてゐる。然しケイン氏はその年代の判定を誤つてゐる。即ちこの類には十千の祖先名の銘をつけるものがない所から安陽中期(文武丁時代が氏の中期と後期の境)と考へるのであるが(同、三六四頁)、これは十千の祖先名の銘は安陽期に始まるといふ同氏の説に據つてゐるのである。氏の考への根據が薄弱なことは第一章に記した通りである。

挿圖出所目録

- 鼎①(1)河南省文化局文物工作隊一九五八、圖版二、2
 (2)京都大學人文科學研究所(以下「京大人文研」と略稱)考古資料
 (梅原一九五九—六二、二〇〇)

- (3) 嘉納一九三四、二
 - (4) 郭沫若一九六〇、圖版一、2
 - (5) 京大人文研考古資料(藤井一九四二、文二)
 - (6) 史言一九七二、圖版五、1
 - (7) 長水一九七二、圖一〇
 - (8) 中國古代青銅器選、二五
 - (9) Karlgren 1947, pl. 9.
 - (10) 上海博物館一九六四、二九
 - (11) 五省出土重要文物……一九五八、圖版三〇、1
 - (12) 吳鎮烽等一九七五、圖版九、1
- 鼎②(1) 商承祚一九三五、鏡一
- (2) 陝西省博物館等一九六〇、一七
 - (3) Karlgren 1959, pl. 5a.
 - (4) White, pl. 74.
 - (5) 關東局一九四三、圖版一九、6
 - (6) 容庚一九三八、四
 - (7) 上海博物館一九六四、四五
 - (8) 岐山縣文化館等一九七六、圖版二、1
- 鼎③(1) 中國科學院考古研究所安陽發掘隊一九六四、圖版二、2
- (2) 山東省文物管理處等一九五九、六五
- 鼎④(1) 商承祚一九三五、貯五
- (2) 故宮博物院藏品資料選介、六八頁左下
 - (3) 黃濬一九四二、上七
 - (4) Karlgren 1937, pl. 2, 53.
 - (5) Eicke 1943, pl. 5.
 - (6) 梁思永等一九七〇、圖版一二三
 - (7) 齊泰定一九六四、圖版一二、5
 - (8) Karlgren 1952, pl. 1.
 - (9) Loo 1940 pl. 18, no. 30.

- (9) Eicke 1939, pl. 7.
 - (7) 長水一九七二、圖六
 - (8) Pope et al. 1967, pl. 34.
 - (9) 上海博物館一九六四、二八
 - (10) 羅振玉一九三五、上二四
- 鬲鼎①(1) 黃濬一九四二、上二二
- (2) Heusden 1952, pl. 15.
 - (3) 梁星彭等一九六三、圖版一、3
 - (4) 黃濬一九三六、一、一八
 - (5) 商承祚一九三五、契一七
 - (6) 容庚一九二九、八
- 鬲鼎②(1) 于省吾一九三四、上六
- (2) 出土文物展覽工作組一九七二、三九上
 - (3) 濱田耕作一九一九、二
 - (4) 商承祚一九三五、鏡一
- 尊①(1) 中國科學院考古研究所安陽發掘隊一九六四、圖版二、3
- (2) Kidder 1956, pl. 3.
 - (3) 臨沂文物收集組一九六五、圖一三
 - (4) 山東文物管理處等一九五六、七四
 - (5) 于省吾一九三四、上一
 - (6) 梅原末治一九五九、六一、一三五
 - (7) 同右、一三八
 - (8) 同右、一三九A
 - (9) Yets 1929, I, pl. 6, A 9.
 - (10) 梅原末治一九三三、a、一三
 - (11) 新中國出土文物、四四
 - (12) 梅原末治一九三三、圖版六
 - (13) 唐蘭一九七六、圖一

- (14) 國立故宮中央博物院聯合管理處一九五八、下、上二〇二
 - (15) 中國の青銅器、一
 - (16) 國立故宮中央博物院聯合管理處、下、下、二二五
 - (17) Pope et al. 1967, p. 18.
 - (18) 京大人文研考古資料寫真(水野清一、一九五九、一一)
 - (19) 梅原末治一九三三 a、一七
 - (20) Pope et al. 1967, p. 38.
 - (21) 根津美術館一九四二、一八
 - 尊② (1) Kelley et al. 1946, p. 23.
 - (2) 『西清古鑑』八、三三三
 - (3) Loo 1940, pl. 16, no. 27.
 - (4) 嘉納治兵衛一九三四、四
 - (5) 陝西省博物館等一九六〇、五六
 - (6) 梁星彭等一九六三、圖版二、1
 - (7) 藤井善助一九四二、黃二
 - 尊③ (1) 河南省文物工作隊一九五八、圖版二、4
 - (2) 陝西省博物館一九六五、圖版三、1
 - (3) Leth 1959, no. 9.
 - (4) 甘肅省博物館文物組一九七二、圖四
 - (5) 濱田耕作一九一九、一八
 - (6) 湖南省博物館一九六六、圖一〇
 - (7) Kimmel 1930, T. 9.
 - (8) 王家祐一九六一、圖三右
 - (9) 嘉納治兵衛一九三四、七
 - (10) 黃濬一九三六、一、三五
 - (11) 國立故宮中央博物院中央管理處一九五八、下、下、二三三
 - (12) 黃濬一九三六、一、三〇
 - (13) 濱田耕作一九一九、一七
 - (14) 梅原末治一九三三 a、二三三
-
- 尊④ (1) 關東局一九四三、圖版一五、8
 - (2) 容庚一九四一、下、五一五
 - (3) 嘉納治兵衛一九三四、八
 - (4) 中國科學院考古研究所等一九七四、圖版八、4
 - (5) 孫海波一九三八、一二
 - 尊⑤ (1) 陝西省博物館等一九六〇、二二
 - (2) 同右、五
 - (3) 于省吾一九四〇、上九
 - 尊⑥ (1) a 國立故宮中央博物院聯合管理處一九五八、下、上、一〇九
 - (1) q Chinese Exhibition, pl. 6, 12.
 - (2) 國立故宮中央博物院聯合管理處一九五八、下、上、九九
 - (3) a、b 樋口隆康氏攝影寫真
 - 尊⑦ (1) 劉東亞一九六四、圖一、5
 - (2) 河南省文化局文物工作隊一九五八、圖版二、6
 - (3) White 1956, pl. 48.
 - (4) Karlgren 1959, pl. 37 a.
 - (5) 中國科學院考古研究所安陽發掘隊一九六四、圖版二、1
 - (6) 山東文物管理處等一九五九、六六
 - (7) 郭沫若一九六〇、圖版三、1
 - (8) 梁星彭等一九六三、圖版一、5
 - (9) 梅原末治一九五九—六二、六五
 - (10) 同右、六七
 - (11) Yets 1929, pl. 118.
 - (12) 陳夢家一九五五—六、(一)、圖版九
 - (13) 孫海波一九三八、一五
 - (14) Pope et al. 1967, pl. 54.
 - (15) 濱田耕作等一九一九、六三
 - 尊⑧ (1) 山東省文物管理處等一九五九、七五
 - (2) 葛今一九七二、裏表紙裏圖2

(3) Karlgren 1959, pl. 32 a.
卣③(1)梅原末治一九五二、七

(2)同右、五

(3)高至喜一九六三、圖版四、1

(4)d'Argencé 1966, pl. 26.

(5)Karlgren 1952, pl. 18.

(6)『中國古代青銅器選』一二六

(7)水野清一九五九、八八

(8)根津美術館一九四二、三一

卣④(1)出土文物展覽工作組一九七二、三一

(2)馬承源一九六四、圖版四、1

(3)Pope et al. pl. 58.

(4)梅原末治一九三三、圖版一〇

(5)同右、圖版六

(6)梅原末治一九五一、二

(7)Lodge et al. 1946, pl. 29.

卣⑤(1)李曉東一九六五、圖版四、2

(2)梅原末治一九五九—六二、六一

(3)濱田耕作一九一九、五九

卣⑥(1)容庚一九三六、一一四

(2)濱田耕作一九一九、六一

(3)嘉納治兵衛一九三四、一四

卣⑦(1)葛今一九七二、裏表紙裏圖1

(2)Photo from the Asian Art Museum of San Francisco, the Avery

Brundage Collection

(3)水野清一九五九、圖版一〇三

(4)京大人文研考古資料寫真(藤井善助一九四二、黃三)

簋①(1)中國科學院考古研究所安陽發掘隊一九六四、圖版二、4

(2)榮厚一九四七、上、二二

(3)商承祚一九三五、返五

(4)同右、居七

(5)王光永一九七五、圖八、4

(6)中國科學院考古研究所一九六二、圖版七一、2

(7)梅原末治一九五九—六二、一〇九

(8)容庚一九三八、三三一

(9)White 1956, pl. 70.

簋②(1)程學華一九五九、七二頁圖

(2)Karlgren 1959, pl. 25a.

(3)京大人文研考古資料寫真(黑川古文化研究所藏)

(4)濱田耕作一九一九、一〇三

(5)『泉屋清賞』新收編、三

(6)Lodge 1946, pl. 19.

(7)Karlgren 1952, pl. 49.

(8)賀官保一九六四、圖版七、2

(9)五省出土重要文物展覽籌備委員會一九五八、二二、1

(10)濱田耕作一九一九、續一八〇

(11)出土文物展覽工作組一九七二、三九下

簋③(1)From The Arthur M. Sackler Collection

(2)The Chinese Exhibition, pl. 7, 260 A.

(3)Heusden 1952, pl. 21.

(4)濱田耕作一九一九、續一八一

(5)容庚一九四二、下、二六二

簋④(1)甘肅天水居民捐贈珍貴銅器、一一八

(2)京大人文研考古資料寫真

(3)南京博物院等一九六三、七〇

(4)容庚一九四一、下、二九八

(5)京大人文研考古資料寫真

(6)水野清一九五九、九五

(7) Pope et al. 1967, pl. 66.

(8) 容庚一九三六、五五

(9) 岐山縣文化館等一九七六、圖版四、6

(10) 濱田耕作一九一九、一〇五

引用文獻目錄 (著者名五〇音順)

- 赤塚 忠 一九五九、『稿本殷金文考釋』東京
 于 省吾 一九三四、『雙劍謄古金圖錄』北京
 于 省吾 一九四〇、『雙劍謄古器物圖錄』北京
 于 省吾 一九六四、司母戊鼎的鑄造和年代問題、『文物精華』三、三九一—四〇
 梅原末治 一九三三、『校禁の考古學的考察』京都
 梅原末治 一九三三a、『歐米蒐儲支那古銅精華』京都
 梅原末治 一九四〇、『河南安陽遺寶』京都
 梅原末治 一九五九—六二、『日本蒐儲支那古銅精華』京都
 梅原末治 一九五一、『白鶴古金選集』神戸
 榮 厚 一九四七、『冠帶樓古金圖』京都
 王 光永 一九七五、陝西省寶雞市峪泉生產隊發現西周早期墓葬、『文物』一九六五、三、七二—七五
 王 家祐 一九六一、記四川彭縣竹瓦街出土的銅器、『文物』一九六一、一一、二八—三一
 岡田芳三郎 一九五三、寶雞閼雞臺の諸器について——中國古銅器聚成への一つの試み——『東方學報』京都二三冊、二一九—二二九
 河南省文化局文物工作隊 一九五八、一九五八年春河南安陽市大司空村殷代墓葬發掘簡報、『考古通訊』一九五八、一〇、五一—六一
 嘉納治兵衛 一九三四、『白鶴古金集』神戸
 賀 官保 一九六四、洛陽市北賓龍家溝出土西周銅器、『文物』一九六四、九、五四—五五
 貝塚茂樹 一九三八、殷代金文に見えた圖象文字に就て、『東方學報』

京都九、五七一—一一一

郭 沫若 一九五七、『兩周金文辭大系圖錄考釋』北京

郭 沫若 一九六〇、安陽圓坑墓中鼎銘考釋、『考古學報』一九六〇、一、一一三

葛 今 一九七二、涇陽高家堡早周墓葬發掘記、『文物』一九七二、七、五一—八

甘肅省博物館文物組 一九七二、靈臺白草坡西周墓葬、『文物』一九七二、一二、二一—八

甘肅天水縣居民捐贈珍貴銅器、『文物參考資料』一九五五、六、一二七—八

關 東局 一九四三、『旅順博物館圖錄』東京

岐山縣文化館龐懷清、陝西省文管會鍾烽、忠如、志儒 一九七六、陝西省岐山縣董家村西周銅器窖穴發掘簡報、『文物』一九七六、五、二六—四四

故宮博物院藏藏品資料選介、『文物』一九六六、五、六八—七三

湖南省博物館 一九六六、湖南省博物館新發現的幾件銅器、『文物』一九六六、四、一一—六

五省出土重要文物展覽籌備委員會 一九五八、『五省出土重要文物展覽圖錄』北京

吳鎮烽、維忠如 一九七五、陝西省扶風縣強家村出土的西周銅器、『文物』一九七五、八、五七—六二頁

高 至喜 一九六三、湖南寧鄉黃材發現商代銅器和遺址、『考古』一九六三、一二、六四六—八

黃 濬 一九三六、『魯古齋吉金圖錄』北京

黃 濬 一九四二、『鄒中片羽三集』北京

國立故宮中央博物院聯合管理處 一九五八、『故宮銅器圖錄』臺北

山東省文物管理處、山東省博物館 一九五九、『山東文物選集』北京

史 言 一九七二、鄆縣楊家村大鼎、『文物』一九七二、七、三一—四

上海博物館 一九六四、『上海博物館藏青銅器』上海

出土文物展覽工作組 一九七二、『文化大革命期間出土文物』一、北京

- 商 承祚 一九三五、『十二家吉金圖錄』、北京
- 白川 靜 一九二一、七五、『金文通釋』、『白鶴美術館誌』第一一四、五輯
- 白川 靜 一九七一、『金文の世界』、東京
- 『新中國出土文物』一九七二、北京
- 鄒 衡 一九六四、試論殷虛文化分期、『北京大學學報』人文科學、一九六四、四・五（北京大學歷史系リプリント）
- 『西清古鑑』一七四九、北京
- 齊 泰定 一九六四、安陽出土的幾件商代青銅器、『考古』一九六四、一、五九一二
- 『泉屋清賞』新收編、一九六一、京都
- 陝西省博物館 一九六五、陝西省博物館鑒選一批歷史文物、『文物』一九六五、五、二一四
- 陝西省博物館、陝西省文物管理委員會 一九六〇、『陝西省博物館、陝西省文物管理委員會藏青銅器圖釋』、北京
- 孫 海波 一九三八、『濬縣彝器』、北京
- 『中華人民共和國古代青銅器展（カタログ）』一九七六、東京
- 中國科學院考古研究所 一九五六、『輝縣發掘報告』、北京
- 中國科學院考古研究所 一九六二、『澧西發掘報告』、北京
- 中國科學院考古研究所安陽發掘隊 一九六一、一九五八—一九五九年殷虛發掘簡報、『考古』一九六一、二、六三—七六
- 中國科學院考古研究所安陽發掘隊 一九六四、一九六二年安陽大司空村發掘簡報、『考古』一九六四、八、三八〇—四
- 中國科學院考古研究所、北京市文物管理處、房山縣文教局、琉璃河考古工作隊 一九七四、北京附近發現的西周奴隸殉葬墓、『考古』一九七四、五、三〇九—二一
- 『中國古代青銅器選』一九七六、北京
- 『中國の青銅器』（天理參考館、資料案内シリーズ、10）一九七一、天理
- 長 水 一九七二、岐山賀家村出土的西周銅器、『文物』一九七二、六、二五—七

殷西周間の青銅容器的編年

- 陳 夢家 一九五五、『西周年代考』、上海
- 陳 夢家 一九五五—六、西周銅器斷代（一）、『考古學報』九—一九五六、四
- 程 學華 一九五九、寶雞扶風發現西周銅器、『文物』一九五九、一一、七—三
- 唐 蘭 一九七六、虢尊銘解釋、『文物』一九七六、一、六〇—三
- 董 作賓 一九三三、甲骨文斷代研究例、『慶祝蔡元培先生六十五歲論文集』上、三三—四二
- 董 作賓 一九四五、『殷虛書契』、南溪
- 南京博物院、南京市文物保管委員會、江蘇省文物管理委員會、江蘇省博物館 一九六三、『江蘇省出土文物選集』、北京
- 根津美術館 一九四二、『青山莊清賞』古銅器編、東京
- 馬 衡 一九二八、中國之銅器時代、『考古學論叢』一、九—一五
- 馬 承源 一九六四、記上海博物館新收集的青銅器、『文物』一九六四、七、一〇—一九
- 馬 承源 一九七六、何尊銘文初釋、『文物』一九七六、一、六四—五
- 濱田耕作 一九一九、『泉屋清賞』、京都
- 林已奈夫 一九五三、殷周青銅器に現れる龍について、附論——殷周銅器における動物表現形式二三について、『東方學報』京都二三、一八一—二一八
- 林已奈夫 一九七〇、殷中期に由來する鬼神、『東方學報』京都 四一、一—七〇
- 林已奈夫 一九七二、『中國殷周時代の武器』、京都
- 樋口隆康 一九六三、西周銅器の研究、『京都大學文學部研究紀要』第七、一一—五頁
- 藤井善助 一九四二、『有隣大觀』、京都
- 水野清一 一九五三、殷商青銅器編年の諸問題、『東方學報』京都 二三、七九—一三四頁
- 水野清一 一九五九、『殷周青銅器と玉』、東京

- 容 庚 一九二九、『寶溫樓彝器圖錄』北京
 容 庚 一九三六、『善齋彝器圖錄』北京
 容 庚 一九三八、『頌齋吉金續錄』北京
 容 庚 一九四一、『商周彝器通考』北京
 羅 振玉 一九一七、『殷文存』
 羅 振玉 一九三五、『貞松堂吉金圖』
 李 曉東 一九六五、河北省文化局收得一件有銘文銅提梁卣、『文物』一九六五、五、五及一七
 劉 克甫 一九六一、安陽后岡圓形葬坑年代的商討、『考古』一九六一、九、五〇—一
 劉 東亞 一九六四、河南淮陽出土的西周銅器和陶器、『考古』一九六四、三、一六三—四
 梁思永、高去尋 一九七〇、『侯家莊、第五本、一〇〇四號大墓』臺北
 梁星彭、馮孝堂 一九六三、陝西長安、扶風出土西周銅器、『考古』一九六三、八、四二—五
 臨沂文物收集組 一九六五、山東蒼山出土青銅器、『文物』一九六五、七、二七—三〇
 d'Arènes, René-Yvon Lefebvre, 1966, *Ancient Chinese Bronzes in the Avery Brundage Collection*, Berkley.
 Chen Meng-chia, 1946, Styles of Chinese Bronzes, *Archives of the Chinese Art Society of America*, Vol. 1 1945-1946, pp. 26-52.
The Chinese Exhibition, A Commemorative Catalogue of the International Exhibition of Chinese Art, Royal Academy of Arts, November 1635-March 1936, London
 Creel, H. G., 1936, Notes on the Karlgren's System for Dating Chinese Bronzes, *Journal of the Royal Asiatic Society*, 1936, part IV, pp. 463-473.
 Eckel, G., 1939, *Frühe Chinesische Bronzen aus der Sammlung Oskar Trautmann*, Peking.
 " 1943, *Sammlung Lochow, Chinesische Bronzen I*, Peking.
 Heusden, Willem van, 1952, *Ancient Chinese Bronzes of the Shang and Chou Dynasties, an Illustrated Catalogue of the Van Heusden Collection with a Historical Introduction*, Tokyo.
 Kane, Virginia C., 1973, The Chronological Significance of the Inscribed Ancestor Dedication in the Periodization of Shang Dynasty Bronze Vessels, *Artibus Asiae XXXV*, 4, pp. 335-370.
 Karlgren, B., 1936, Yin and Chou in Chinese Bronzes, *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities*, no. 8, pp. 9-156.
 " 1937, New Studies on Chinese Bronzes, *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities*, no. 9, pp. 1-117.
 " 1948, Bronzes in the Hellström Collection, *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities*, no. 20, pp. 1-73.
 " 1952, *A Catalogue of the Chinese Bronzes in the Alfred F. Pillsbury Collection*, Minneapolis.
 " 1959, Marginalia on Some Bronze Albums, *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities*, no. 31, 289-331.
 " 1962, Some Characteristics of the Yin Art, *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities*, no. 34, pp. 1-28.
 Kelley, Ch. F. and Chen Meng-chia, 1946, *Chinese Bronzes from the Buckingham Collection*, Chicago.
 Kidder, J. Edward, Jr., 1956, *Early Chinese Bronzes in the City Art Museum of St. Louis*, St. Louis.
 Kimmel, Otto, 1930, *Jörg Trübner zum Gedächtnis*, Berlin.
 Leth, André, 1959, *Catalogue of Selected Objects of Chinese Art in the Museum of Decorative Art*, Copenhagen.
 Lodge, J. E., Wenley, A. G. and Pope, A., 1946, *A Descriptive and*

- Illustrated Catalogue of Chinese Bronzes acquired during the Administration of John Ellerton Lodge*, Washington.
- Loehr, Max, 1953, The Bronze Styles of the Anyang Period, *Archives of the Chinese Art Society of America*, Vol. 7, pp. 42-53.
- Loo 1940, *An Exhibition of Ancient Chinese Ritual Bronzes loaned by C. T. Loo & Co.*, Detroit.
- Pope, J. H., Gettens, R. J., Cahill, J. and Barnard, N., 1967, *The Freer Chinese Bronzes*, Vol. I, Washington.
- Soper, A. C., 1966, Early, Middle and Late Shang: A Note, *Artibus Asiae*, XXVIII, pp. 5-36
- Waterbury, Florence, 1942, *Early Chinese Symbols and Literature: Vestiges and Speculations*, New York.
- " " 1952, Speculations on the Significance of a Ho in the Freer Gallery, *Artibus Asiae*, XV, 1/2, pp. 114-124.
- Watson, W., 1963, *Handbook to the Collection of Early Chinese Antiquities*, London.
- White W. C., 1956, *Bronze Culture of Ancient China*, Toronto.
- Yetts, W. P., 1929, *The George Eumorfopoulos Collection: Catalogue of the Chinese and Korean Bronzes etc.*, London.